



TITLE:

中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について

AUTHOR(S):

田中, 淡

CITATION:

田中, 淡. 中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について. 東方學報 1977, 49: 67-122

ISSUE DATE:

1977-02-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66542>

RIGHT:

中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について

田 中 淡

はじめに——唐代壁畫古墳の建築圖の資料的價值——

唐代の壁畫古墳は、解放後の調査により、すでに二〇件をこえる遺構が知られている。これらの古墳に描かれた壁畫には、天象、四神、車騎出行、儀仗隊、城郭、樓閣、山水風景など、多彩な主題が含まれている。天象圖、四神圖、あるいは人物圖の服裝・器物などについては、すでにしばしば論じられている^①。しかし、主要な題材のひとつである建築については、王仁波氏が懿德太子墓の壁畫題材の一部として論及しているのを除いて、包括的な紹介や考察がなされていない。これら壁畫古墳に描かれた建築圖は、壁畫の配置・構成の上で重要な要素となっており、そこには、きわめて類型的な建築の細部手法・技法が表現されている。これらは、つぎにのべるように、じゅうらい具體的な資料に乏しかった唐代の木造建築を考えるうえで、貴重な新資料となるものである。

中國の建築は、用途や所有者の階級によって、規模・構造・意匠の各面で多様な展開をしめたことはいうまでもないが、様式・技法の發展の面からいえば、それは大きく二つの系統に分けることが可能である。ひとつは木造の系統であり、もうひとつは磚造と石造の系統である。一部に金屬製の柱や斗拱をもった宮殿建築を傳える史料もあり、じっさい金屬や陶器の材料を用いた建築も知られているが、それらは全體からみればごく特殊な部類である。木造と磚石造の二つの系統

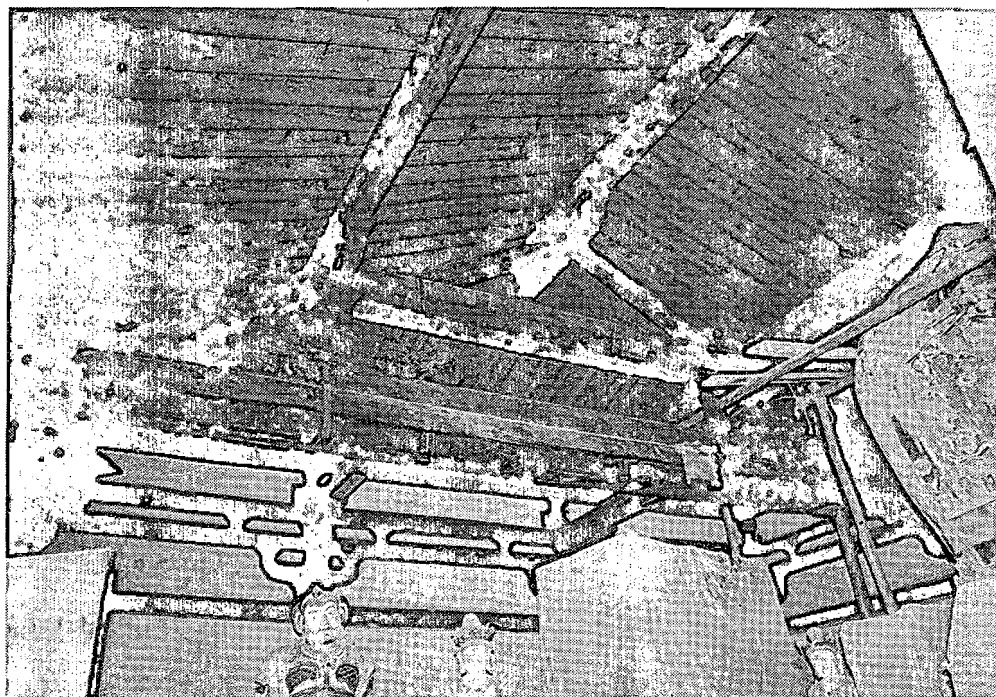


圖1 南禪寺大殿內部

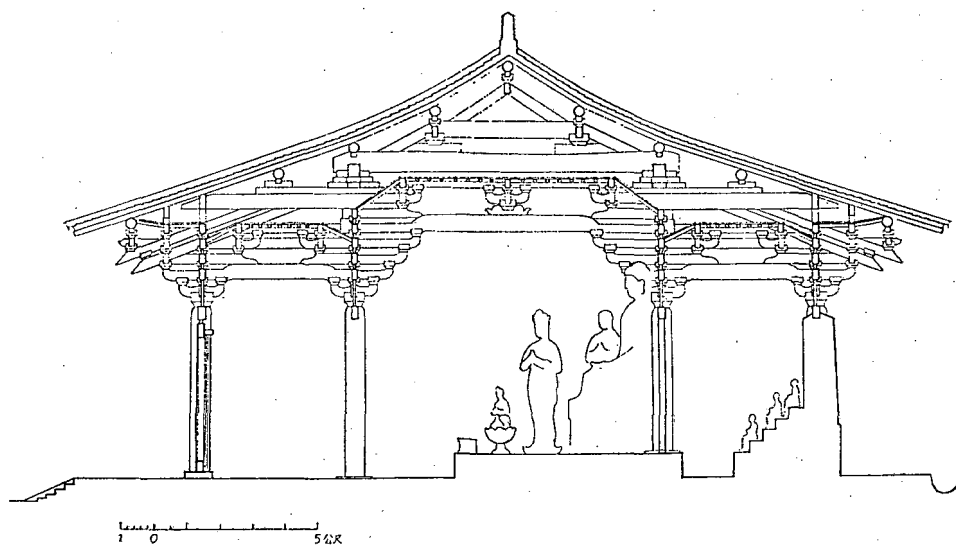


圖2 佛光寺大殿斷面圖

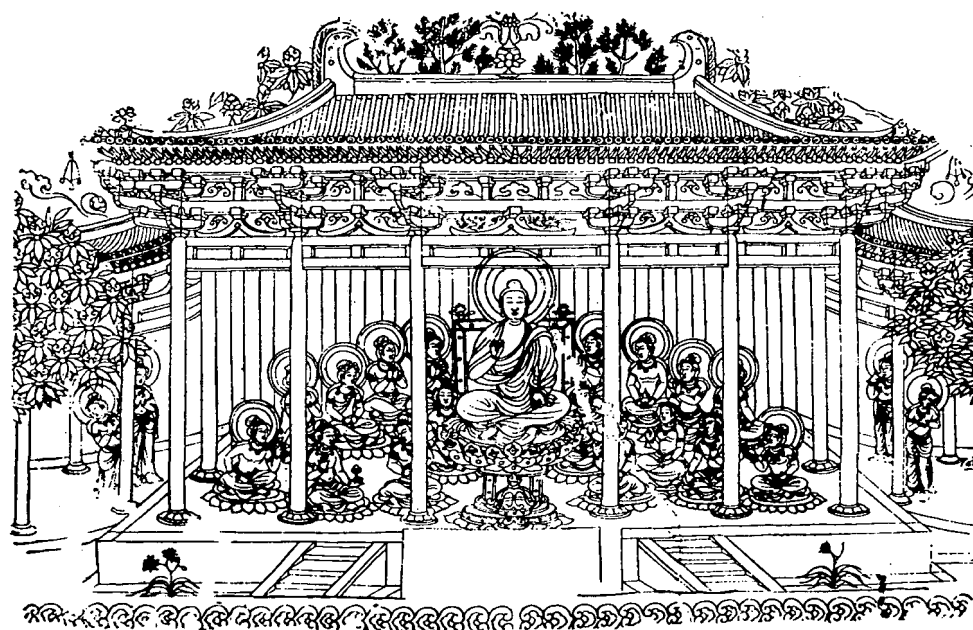


圖3 慈恩寺大雁塔楣石陰刻の佛殿圖

は、たがいに影響を及ぼしあうことはあったが、内部空間を有する建築では、それぞれ異なる構造・技法の體系をつくりあげ、意匠の展開も必然的にそれに制約されることとなった。そして、宮殿・寺廟などの記念的建築と、住宅・園林などの日常的建築という種別にかかわらず、すくなくとも地上の建築を擔ったのは、前者の系統に屬するものがより一般的であったといっている。したがって、中國の建築の發展過程を考えるばあい、木造建築の系統がもっとも大きな比重を占めることは當然である。

ところで、中國の木造建築で、現存する最古の遺構は、唐・建中三年（七八二）の南禪寺大殿（山西五臺）であり（圖1）、大中十一年（八五七）再建の佛光寺大殿（同）がこれにつぐ（圖2）。北宋初期以降は遺構の数も多く、また元符三年（一一〇〇）に將作監の李誠が著わした建築技術書『營造法式』が傳わっているので、構造・技法の細部にいたるまでを知りうるが、晩唐以前の具體的資料はきわめて乏しい状況であった。この時期の木造建築の様式・技法を傳える、實物に準ずる資料としては、長安四年（七〇四）再建の慈恩寺大雁塔（陝西西安）の入口楣石に陰刻された佛殿圖（圖3）のほか、敦煌莫高窟壁畫のなかにいくつかの唐代の建築圖があるにす

ぎなかった。前者はとくに、きわめて克明な描寫であり、詳細な狀況を知りうる資料であるが、後者の多くのものとともに佛教建築に屬するものであるため、そこに表現された建築様式・技法が、普遍的な性格をもつものかどうかという點で、検討の餘地がのこされていたといえる。一方、じゅうらい唐代の建築の具體的な様式を推察するときに用いられた、もうひとつの資料に、當時の中國から學んだ日本の建築遺構があった。^①その代表的な例としてあげられるのは、七三〇年に本藥師寺（六九八年頃完成）の創建様式を踏襲して平城京に建設された藥師寺東塔（日本奈良）、および七七〇年頃建立されたらしい唐招提寺金堂（同）である。當時の平城京の都城制と建築技術が唐から直接學習したものであることは動かしがたい事實であるが、これらの建築にそのまま中國建築の姿が反映されているという保證はない。もちろん、そこに登場している革新的技法は唐から攝取したものにちがいないが、前者に初唐、後者に盛唐を對應させて、母胎となった中國建築様式をパラルルに想定するようなみかたには慎重でなければならない。^②

かつて梁思成氏は、唐代の宮殿と佛殿について論じたが、當時の限られた資料によらざるをえなかったため、唐代の初期と後期における様式的な差異、あるいは宮殿建築と佛教建築の様式上の差異の有無については明確にふれていない。^③しかし、いまここに數多く提供された初唐から盛唐直前の建築圖を加え、たとえば晩唐の佛光寺大殿と比較してみれば、その間に構造・技法の大きな懸隔のあることが指摘できる。この問題に關連して、大明宮含元殿を復原した傅熹年氏はいくつかの注目すべき指摘をおこなっており、小論も氏の研究から多くの教示と示唆を得た。唐代の初期と後期とで建築の様式や技術に差異が認められることの背景、あるいはそうした變化のおこる時期の問題については、今後さらに全體的な建築思潮の傾向と結びつけて考察していかねばならない。ただ、ここで唐代初期の建築の様式・技法上の特色をいくつか抽出することができれば、この時代の建築の變化の方向を考えていく上で、ひとつの指針が得られるとおもわれる（なお、以下の本文中、建築用語は、とくに必要なあい以外は日本の常用語を用い、特有の訓み方はルビを附す。また参考のために、その主なものと中國の術語を

文末説明圖および圖43に注記しておく。

一 漢・六朝の壁畫古墳とその建築圖

唐代壁畫古墳に見られる建築圖の多くは、のちにのべるように、單に獨立した壁畫主題のひとつとしてだけでなく、展開圖の手法を用いて、墓室内部を空間的に表現するための重要な題材となっている。そこで、まず最初に、このような特徴的な表現手法に到達する以前の壁畫の題材のあつかいと建築圖の實例について、概略の状況を見ておくことにしたい。

中國の墓葬畫には、すでに知られるように、畫象石・磚、帛畫、壁畫、そして棺や槨に施された線刻畫などがある。ここで考察の対象にしようとするのは、墓道や墓室の内壁や頂部に描かれた彩色畫の類であるが、墓葬畫としては、これらは共通する性質をもったものである。たとえば畫象石や畫象磚が壁畫ときわめて近似した性質をもった墓室裝飾であることはいままでもなく、その差は、表面的には彫刻と繪畫という表現技法のちがいに歸着するとさえいえよう。しかし、それぞれの出發點や題材のあつかいは、かならずしも同様ではない。また、帛畫で、壁にかけられるものも、ほんらい壁畫の代用として用いられたものである。この種の問題については、すでに長廣敏雄氏が畫象石との關連で論じ、また杉本憲司氏は古代墓葬畫のもつ意味についての見解をしめしている。^⑨ その詳細はそれぞれにゆずることにし、ここでは、本論に直接關連する壁畫についてのみ、とりあげていくことにする。

墓室空間に壁畫を裝飾するものは、すでに長廣敏雄氏が指摘されたように、すくなくとも手法としては、地上の建築の壁畫からとり入れたものと考えられる。地上の建築に裝飾畫を施したことの知られる例は、かなり古くからある。まず壁

畫ときわめて近い手法に、建築の部材じたいに彩色裝飾を施すものがある。これを表現したとおもわれる記述としては、『論語』公治長篇に、魯（前七世紀末）の臧文仲の住宅のことを傳えて、

山の「文様を施した」節、藻の「文様を施した」桷。

とあるのがあげられる。何晏『論語集解』に引く包咸の注には、「節というのは、栴（斗）のことである。山の形を彫刻したものである。桷というのは、梁の上の楹（柱）のことである。藻の文様を彩色で描いたものである」という^⑪。全く同じ表現が『禮記』禮器篇、明堂位篇にも見え、明堂位篇の鄭玄の注にも「山の節、というのは、櫨（斗）に山の形を彫刻したものである。藻の桷、というのは、侏儒柱（束）に藻の文様を彩色で描いたものである」とある^⑫。すなわち、斗に山の形の文様を彫刻し、束に藻の文様の彩色裝飾を描いたものであったと考えられる。また、より明確な記述としては、『楚辭』招魂篇に、祭殿を描寫して、

紅い壁、丹砂を塗った軒の裏板。黒い玉を嵌めた梁。仰ぎ見れば、垂木（たるき）に、龍や蛇を彫刻して彩色が施してある。

というから、垂木に彩色した彫刻が施されていたことが知られる。一方、もうすこし壁畫に近いものでは、後漢の王逸『楚辭章句』天問篇の序に、

楚に先王の廟や公卿の祠堂があつて、そこに天地・山川・神靈・怪奇および昔の賢者・聖人や怪物の故事の繪が描かれていたのを見た。

といつており、戰國時代の楚に、壁畫に類するものがあった可能性を窺わせる。また、逸の子の王延壽「魯靈光殿賦」に、天地を描き、さまざまな生物を分類して並べる。雑多な動物、奇怪な精靈、山の神・海の靈、すべてその姿を寫して載せ、それを繪畫に託している。千變萬化するのだから、ものによって形を變え、色によって區別をつけ、つぶさにそのありさまをとらえている。

というのは、斗栱間小壁や部材に描かれた彩色畫だろう。また、前漢武帝のときに造營された甘泉宮は、『史記』孝武本紀に、

また、甘泉宮をつくった。その中に高い土壇の上に建つ宮室を設け、天地の神や泰一などの諸神を描き、祭具を置いて天神を降そうとした。

といひ、揚雄の「甘泉賦」にも描寫があるが、おそらくは化粧屋根裏や壁面に諸神の像を描いたものであらう。一方、より本格的に、建築の壁面をパネルとして人物像を描いたものでは、前漢・宣帝の甘露三年（前五二）に麒麟閣に描かれた名臣十一人圖が著名であり、後漢・永平年間（五八—七五）の南宮雲臺の二十八將圖、同じく興平元年（一九四）に古神や歷代帝王像などを壁面に描いた蜀郡の文翁學堂など、多くの例が知られている。

つぎに、このような地上の建築を彩っていた壁畫の手法を、墓室に用いたものとしては、秦始皇帝陵がすでに著名である。『史記』秦始皇本紀に、始皇帝三十七年（前二一〇）九月に酈山に埋葬したことを記して、

……水銀を流して百川・江河・大海をつくり、機械でたえずそそぎこむようにした。上には天文をそなえ、下には地理をそなえた。人魚の膏を燭に使用した。……

というので、墓室の頂部に天象圖を描いていたことが知られる。また、陸機の「挽歌詩」に、
 旁薄として四極を立て、穹隆なるは蒼天に放う。側に陰溝の涌くを聴き、臥ぎて天井の懸かるを觀る。

とあるのは、墓室内の頂部や壁面に天象圖や川の壁畫が描かれていた状況を詠んだものである。李善の注には「昔の墓葬は、墓坑のなかに天象や江河をつくった。陰溝とは、江河のことである。天井とは、天象のことである」とある。⁽²²⁾また唐の『西陽雜俎』に傳える古墓を盗掘したときの話に、

第二番めの門を開いてみると、木桶數十駄があり、目をむいて劔を動かし、さらに數人を傷つけた。皆で棒でこれを

打ちすえると、「俑のもっていた」武器はことごとく落ちた。四壁にはそれぞれ衛兵の姿が描かれていた。

とあるのも、護衛の兵士を壁面に描いた古墳が知られていたことをしめすものといえるだろう。

つぎに、實際の遺構をとりあげてみることにする。まず、現在知られるもっとも初期の墓葬畫としては、西周（前九—八世紀）とされる河南省濬縣辛村四二號墓の木槨の壁に、帷幕を張っていたとみられる纖維が付着していた例があげられる。また、戰國時代後期に屬する河南省輝縣固圍村一號墓と三號墓の例では、壁面の下塗り粘土の上に白土を塗り、部分的に色をかえた上塗りが施されていたという。これらは、裝飾古墳として古い例に屬するが、壁畫としてとりあげるべき體裁を整えてはいない。本格的な壁畫古墳として現在知られる最古の遺構は、洛陽燒溝付近のM六一號墓で、前漢末（前四九—前七）のものとみられている。これは、磚造墓で、主室・南北耳室・副耳室よりなり、主室にのみ空心磚、他は普通の磚を用いている。壁畫はいずれも磚の表面に描かれた彩色畫で、主室獨立柱に朱雀・羽龍、その上の楣に山・武士（二桃、三士を殺す故事）、その上の小壁に白虎・鳳凰・人物、前室頂部に天象圖（日月星宿）を描く。これらの彩色畫を施した磚には、繪の部分以外を凹彫するものと全體を平滑にするものがあるが、彩色面は表面をはつてあつたというから、計畫的な壁畫古墳の造營がすでに最古の例から確認されることになる。なお同じく洛陽出土と伝えられる壁畫に、斷片ではあるが、ボストン美術館所藏の大型空心磚、トロント王立オンタリオ美術館所藏のスタンプ畫の空心磚がある。前漢末に屬する遺構には、ほかに内蒙古托克托縣、陝西省千陽縣の例がある。これらを含めて、漢から六朝にかけての壁畫古墳の遺構は、管見の範圍だけで三八件にのぼる（斷片のみ傳わるものは除く）。このうち主なものについての紹介はすでになされているので、ここでは個々の遺構の説明は省略し、それぞれの墓室構成、構成材、壁畫の内容と描かれている仕置などを一括したものを〔表1〕に掲げる（各遺構の引用文献は別に末尾に記す）。なお、ここではすでにのべたように、畫象石墓や帛畫の類は、対象から外している。沂南、楊官寺などの畫象石墓には部分的に彩色が施されているが、一應除外した。なお、表記したものの

〔表1〕漢から六朝の壁畫古墳

所 在	墓群年代	墓室構成	構造材	主な壁面内容	壁画の位置	注
河南省洛陽市老城西北 (M61號墓)	前漢 (前48-7)	墓室、南北耳室・副耳室	空心磚、磚	日月星、女人、羽虎、樹、朱雀、羽龍、武士	前室頂、主室、墓門側	郭沫若1964、河南省文化局 文物工作隊1964、夏竦1965
內蒙古自治區托克托縣	前漢末	前室、中室・東西耳室、後室	磚	人物、車騎出行、庖厨	兩耳室、主室門	羅振頤1956
陝西省千陽縣	前漢末	墓室	土、磚門	日月星、白虎	墓室壁	寶雞市博物館・千陽縣文化 館1975
山西省平陸縣紫園村	後漢前期	墓室、南耳室	磚	青龍、白虎、玄武、日月、牛耕、耕織、山水	墓室頂壁	山西省文物管理委員會1959、 外文出版社1974
山東省梁山縣九區後銀山	後漢	棺室3、前室	磚、石柱礎	都卒、人物、樹、鳥獸、金烏玉兔	前室頂壁	關天相・真剛1955、章毅然1955
江蘇省徐州市東郊黃山麓村	後漢	前室、中室、後室	石	車馬、奏舞、鬥卒	前室壁	葛治功1961
甘肅省酒泉縣城下河清 (1號墓)	後漢	前室、中室、後室	磚	文樣	磚片	甘肅省文物管理委員會1959
內蒙古自治區和林格爾縣新店子	後漢 (189-40)	前室・南北耳室、中室・南 耳室、後室	磚	人物、車馬、鳥獸、縣城、郡府、莊園、衙署	墓道・各室頂壁	內蒙古文物工作隊等1974、 編訂1974、外文出版社1974
河北省望都縣 (1號墓)	後漢後期	前室、中室、後室	磚、石門	人物群像、禽獸、花草、雲紋	前室・前過洞頂壁	北京歷史博物館等1955、姚聖 1954、安志敏1957、林樹中1958
河北省望都縣 (2號墓)	後漢後期	前室、中室、後室	磚	人物群像	前室・二室	何武剛1959、外文出版社1974 河北省文化局文物工作隊1959
甘肅省武威雷台	後漢後期	前室・南北耳室、中室・南 耳室、後室	磚	文樣	墓門、墓室壁 前後室頂	甘肅文1972、 甘肅省博物館1974
河南省密縣打虎亭 (2號墓)	後漢後期	前室、中室・西室・南北東 耳室、後室	磚	奏舞、百戲、轎輦、家、車騎、庖厨、侍女、 角抵	中室壁	安全機・王與剛1972、 外文出版社1974
遼寧省遼陽市三道壕第四官廠	後漢	棺室2、左右耳室、前廊	石	人物、飲食、庖厨、車馬、蓋車	兩耳室、右棺室、前廊	李文昌1955
遼寧省遼陽市西郊棒台子屯 (1號墓)	後漢	棺室3、回廊、南北小室、西室	石	鬥卒、飲食、庖厨、車馬、樂伎、樂伎、住宅	棺室背面	李文昌1955
遼寧省金縣縣城子 (2號墓)	後漢	前室、棺室、回廊、東西耳室	磚	龍、神人、鳥、人物、風・雲、鶴、怪神、虎、蛇	棺室內外壁	東北考古學會1934
遼寧省遼陽縣北園 (6號墓)	後漢	棺室、回廊、北3・東1・南2 耳室	石	樓閣、宮室、倉庫、人物、樹、龍伎、騎鶴	四周壁、棺室壁	壽井1944、同1950
遼寧省遼陽縣太子河迎水寺	後漢	棺室4、回廊、後室	石	庖厨、牛車、人物、家居、飲食、帳幕	四周壁	塚本1921、八木1921、 澤田1930
遼寧省遼陽縣南林子	後漢	前室・東西耳室、棺室、回廊	石	人物群像、樹、帳幕、牛車、人物、鼓	四周壁	塚田1943
遼寧省遼陽市西郊棒台子屯 (2號墓)	後漢末	前室・東西耳室、棺室4 後室	石	鬥卒、車騎、住宅、宴飲、車、雲氣	各室壁	王增新1960 a
遼寧省遼陽縣安平區小屯鄉南宮柳 (2號墓)	後漢末	前室・東西耳室、棺室3、 中室、後室	石	住宅、宴飲、雲水	門柱、欄、袖壁	王增新1960 b
遼寧省遼陽縣玉皇廟	後漢末	不詳	石	雲氣文樣	門柱	岡崎1964
甘肅省崆峒市新城 (1號墓)	魏一晉	前室、東西耳室、中室、後室	磚	人物、庖厨、鳥獸、鳩、耕種、牧畜、宴飲、 狩獵	前後室壁磚片	崆峒市文物清理小組1972、 甘肅省博物館等1974、外 文出版社1974
同 上 (3號墓)	魏一晉	前室、東西耳室、中室、後室	磚	人物、鳩、耕種、庖厨、耕種、肥地、奏樂	前・中・後室壁磚片	同上、甘肅省博物館1976
同 上 (4號墓)	魏一晉	前室、後室	磚	人物、庖厨、農牧、狩獵、胡帛、工具、鬥卒	前・後室壁磚片	崆峒市文物清理小組1972 甘肅省博物館等1974、外文 出版社1974
同 上 (5號墓)	魏一晉	前室、後室	磚	人物、採桑、狩獵、放牧、出行、牛耕	前室壁磚片	同上
同 上 (6號墓)	魏一晉	前室、中室、後室(?)	磚	牛耕、肥地、牛、駱駝、牛車、庖厨	前・中室磚片(?)	甘肅省博物館等1974、外文出 版社1974
同 上 (7號墓)	魏一晉	前室、中室、後室(?)	磚	採桑、牛、狩獵、庖厨、馬車	前・中室磚片(?)	同上
甘肅省敦煌縣南區 (1001號墓)	魏一晉	不詳	磚	人物、禽獸、文樣	墓室柱斗拱	夏竦1955
遼寧省遼陽市三道壕2官廠 (1號墓・張君墓)	魏一晉	前室、左右耳室	石	人物、住宅、庖厨	右耳室壁、墓門袖壁	東北博物館1955
同 上 (2號墓)	魏一晉	前室、西耳室、棺室2	石	人物、帳幕、日	耳室頂壁	同上
遼寧省遼陽縣上王家村	西晉	前室・南北耳室、棺室2	石	宴飲、車騎出行	耳室壁、棺室前柱	李慶豐1959
河南省靈寶縣城頭村 (1號墓)	晉	前室・左右耳室、中室、後室	磚	馬車、人物	前室門	俞錫華1958
雲南省昭通縣后海子 (霍永嗣墓)	東晉 (386-94)	墓室	石	人物、群像、騎、樓閣、鳥獸、王女、青龍、 朱雀	墓室壁	雲南省文物工作隊1963
江蘇省南京市西善橋	東晉・梁	墓室、前室	磚	人物 (竹林七賢)	墓室壁	南京博物院等1960、胡耀高 1964
河南省沁陽縣村李莊	南北朝	墓室	磚	獸頭、飛仙、鬥卒	墓門	河北省文化局文物工作隊 1958、柳浩1959
河南省洛陽市向北村 (元父墓)	北魏 (526)	墓室、東西耳室	土	天象、四神	墓室頂壁	洛陽博物館1974、王季・陳徐 1974
陝西省咸陽縣底張灣 (杜敬墓)	北周 (566)	不詳	不詳	人物	不詳	俞錫華1958、中國古典藝術出 版社1955

うち、鄧縣學莊の例は畫象石に彩色を施したもので、技法的にはむしろそれに近いが、墓門の彩色は磚の上に漆喰を塗った上に描かれた壁畫の手法に屬するものである。また、嘉峪關の數件の壁畫や酒泉下河清一號墓は、小片の磚に細かい題材を描いたもので、やや特殊な系統に屬するものである。

つぎに、これらの壁畫古墳において主要な題材となっているものをあげておく。

四神圖 東・青龍、西・白虎、南・朱雀、北・玄武の四方の守神をあらわすもので、畫象石墓では、すでに後漢末の沂南の前室中央獨立柱礎石の四面に配された例があるが、²⁷⁾壁面古墳では完全な例はすくない。山西省平陸縣の後漢初期のものに、朱雀を缺いて、北に青龍、南に白虎、西に玄武の三神を、方位を回轉させて配した例（墓室は西向き）がある。

日月星宿圖 前漢末の洛陽六一號墓の墓室頂部をなす細長い長方形の部分に日・月・星・雲が描かれているのをはじめとして、陝西省千陽縣（前漢末）、山西省平陸縣（後漢初期）、遼陽三道壕第二窖廠二號（魏晉）、洛陽・元父墓（北魏）などの例がある。いずれも墓室または前室の壁面上部あるいは頂部に描かれる。

人物圖 人物を描いた壁畫には、さまざまな内容が含まれており、その主題や配置は一様ではない。このうち、もっとも大きな部分を占めるのは、墓主の生前の活動・功業や日常生活の状況を表現したもので、一般には前室に描かれることが多い。四周廻廊式の遼陽の壁畫墓では四周の壁や棺室の外壁に描かれるものが多い。墓主の生前の榮華をしめたものとしては、和林格爾の、墓主の官僚としての足跡を描いた一連の壁畫群が代表的なものであるが、この種の壁畫題材をかりに類別すれば、車馬出行圖、宴飲圖、樂舞・百戲圖、官吏・侍衛圖などがある。車馬出行圖は、前漢末の内蒙古托克托縣のものをはじめとして、後漢の徐州黃山隴、和林格爾、棒臺子一號、密縣打虎亭二號などの例がある。墓主を中心とする饗宴・宴飲を描いた例は、洛陽六一號のほか、棒臺子一號・二號などの遼陽の壁畫古墳群や、嘉峪關一號（魏晉）などにある。樂舞・百戲圖は、密縣打虎亭二號、棒臺子一號、北園などに見られる。官吏や侍者たちを描いた壁畫には、生活の

情景の一部として描かれるものと、実際の墓室構成にあわせて門卒や侍衛を描くものがある。後者の實例は、それぞれの官名を題した後漢の望都一號をはじめとして、和林格爾、打虎亭二號、棒臺子一號ほかの遼陽のものなどに多く見られる。一方、實際の生活の情景を描いたものには、托克托、和林格爾、打虎亭二號、三道壕第四窖廠などに見える庖厨圖、和林格爾・平陸・嘉峪關などに見える農耕圖、あるいは牧畜、角抵などの圖がある。人物圖のうちひとつのタイプは、歴史的故事など、墓主自身の關係以外に題材をとったもので、前述の洛陽六一號墓の例があるが、畫象石墓には類例が知られている。壁畫古墳では、このほか南京西善橋南朝墓の竹林七賢圖が著名である。

神人・怪獸圖 漢代の壁畫古墳では、洛陽六一號墓の女人像、營城子二號墓の怪神の頭部を描いた圖などの例があり、畫象石墓と共通する題材のひとつである。これらは、墓門に描かれることが多い。²⁸⁾

このほか、自然の山水風景を描いたもの、主題の一部に車、器物、動物その他を描くものもあるが、ここでは詳しくはふれない。つぎに、本論の主題である建築圖についてのべる。

建築圖 漢から六朝の壁畫古墳に見られる建築の圖は、ほとんどが墓主の生前の生活情景の一部として描かれたものである。そのため、多くは簡単な描寫になり、細部の表現をとまなうものはきわめてすくない。したがって、様式・技法的にはあまり参考にならないが、以下に建築圖を有する遺構を列挙してみる。

和林格爾漢墓 後漢・中平五年（一八九）ころの建設と見られている磚造墓で、墓室は前室・南北耳室、中室・南耳室、後室よりなり、墓道および各墓室の壁面・頂部に壁畫が數多く描かれている。主題は前述のように墓主の生前の事蹟を中心としており、建物を描いた圖もかなりある。この墓に描かれた建築のいくつかについては羅哲文氏の論考²⁹⁾があるので、詳細はそれにゆずるが、建築を描いた圖にはつぎのようなものがある。すなわち、寧城の圖（中室東壁）、繁陽縣令官寺の圖（同南壁）、土軍城府舎の圖（同）、離石城府舎の圖（同）、庄園の圖（後室南壁）、武城の圖（同北壁）、渭水橋の圖（中室西壁入口上部）、

幕府門の圖（前室前壁）、幕府東門の圖（前室東壁）、幕府谷倉の圖（前室南壁）、居庸關の圖（中室入口上部）および柱・桁・斗拱の圖（北耳室ほか）である。これらのうち、もっとも詳細なものは寧城の圖（圖4）で、縣城内の建物を描き、各部分にその名稱などを記しているのが、概略の配置が知られる。圖の構成は、縣城の配置を象って四周を城壁で囲み、そのなかに東・西・

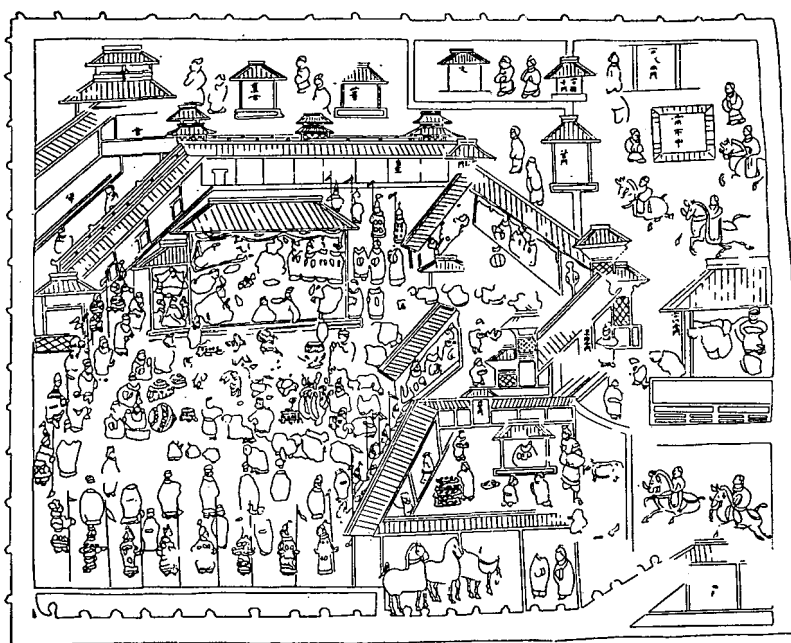


圖4 和林格爾後漢墓・寧城の圖（中室東壁）

南の三つの城門、上部（東）に衙署「寧縣寺」、上部右（東南）に市場「寧市中」、および中央左寄り（西北）に護烏桓幕府の一郭を、それぞれ立面を描いて配したものである。城門は、南門は高い基壇に立つ寄棟造、西門は單層寄棟、東門は不詳。衙署の部分は、いずれも單層寄棟の「寧縣寺門」と、その北がわに「吏舍」を描く。もっとも廣い面積を占める幕府は、南に間口三間・單層の「幕府南門」を開き、その前方左右に寄棟の母闕・子闕よりなる闕をひとつずつ付設し、全體は三つの望樓のついた長い廊でとり圍まれて中庭を形成する。中庭は南北二つに分れる。中央に單層寄棟の大きな建築があり、左に付屬屋を伴っている。これが幕府の中心的建築「堂」であることは疑いなく、左の部分は羅哲文氏の指摘されたように「寢」すなわち居住部分とみられるが、中庭を南北に分斷する廊との關係や寧城南門の向きの表現を見ると、前後の位置關係は即斷しかねる。後庭後方には間口四間の横長の建物、その後には「庫」と記さ

れた一郭がある。幕府の東がわには「司馬舎」「營曹」と記した單層寄棟の營舎の一郭がある。幕府西南隅には廊で囲まれた料理を行う一郭があり、その東に「共官門」を開く。これらの配置は、墓主の生前の官吏としての功業を強調する意圖から、幕府中心部を誇張して描いているとみられるので、規模を正確に伝えるものではないだろう。繁陽縣令官寺の圖も、同様な描寫であるが、個別の建物名の記入はなく、より簡単な表現である。四周を塀で囲んだ一郭のなかに、さらに區畫した衙署の中心部らしい一郭があり、重層寄棟の廳堂を描いている。武城の圖には、子闕をもった一對の三層の闕があり、簡單ながら二手先斗拱、生子壁なまこかべのような腰壁こしかべの描寫がみえる。幕府東門の圖には、いずれも單層寄棟の青龍・白虎を描いた「東門」、兵器庫、府舎、および重層寄棟の穀物倉が見える。これらの建築圖は、縣城・衙署の配置や部分的色彩を知る資料とはなるが、たとえば一律に寄棟の屋根を描いているように、細部の表現については問題がある。この墓の壁

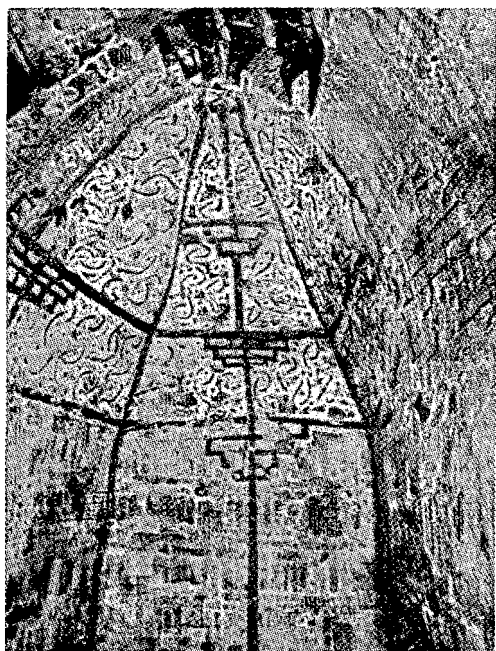


圖5 和林格爾後漢墓、柱・桁・斗拱の圖
(北耳室壁・頂部)

畫で、もうひとつ注目すべき題材は、墓室の壁面からドーム狀寶形の頂部にかけて、朱塗りでしめされた柱・桁けた・斗拱の圖である(圖5)。これは、實際の墓室空間の構造になぞらえて擬似的な架構を表現したもので、後述の唐代壁畫古墳の擬似架構圖に先行するものとして注目されるが、唐代のようにこれを展開圖の表現として積極的に用いてはいない。また、この墓に見える柱や斗拱は、いずれも朱色の太線による簡略化した表現で、寫實性に缺ける。斗拱の存在をしめす記述は、前掲の『論語』、『禮記』などよりみられ、前漢末には完成された形態を伝える實物があるから、これらの圖が省略的表現

であることは疑いないだろう。

平陸漢墓 磚造、ヴォールト構造になり、墓室・耳室からなる。建築圖は、牛耕圖（墓室西壁）に見える作業小屋のようなものと、山麓に城堡を描いた圖（同北壁）がある。後者は、庄園の城堡と見られており、三方を壁で圍み、山側を重層にした土造のような城堡であるが、いずれもごく簡単な描寫である。

梁山漢墓 前室は疊頂式、三つの棺室は各ヴォールト式の磚造墓で、前室の壁・頂に墓主の生前の事蹟を描く。建築圖は、南壁に「都亭」と記されたものがある（圖6）。上層の間口が三間の重層寄棟造の建物で、上層の各柱間に一人ずつ老人を描き、下層にも一人の人物を描く。その左には「曲成侯驛」と記して捕捉された人物を描いており、この建物は、盜賊の求捕などを主持した亭長の驛亭である。

棒臺子一號墓 遼陽周邊で多く發見された壁畫古墳のひとつで、構造は他の遺構と同様な石造パネル式である。後（西）回廊南壁に住宅の圖を描く（圖7）。寄棟、三階建で、軸部材を赤、屋根を黒、窓を白に塗る。配置よりみて住宅の廳堂（主屋）らしいが、細部の表現

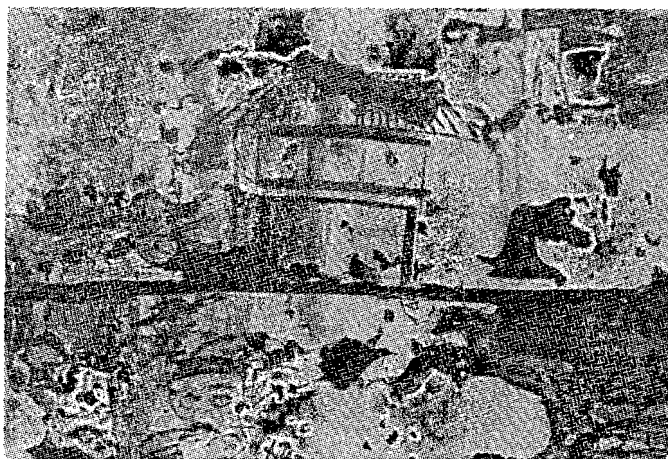


圖6 梁山漢墓、都亭の圖（前室南壁）

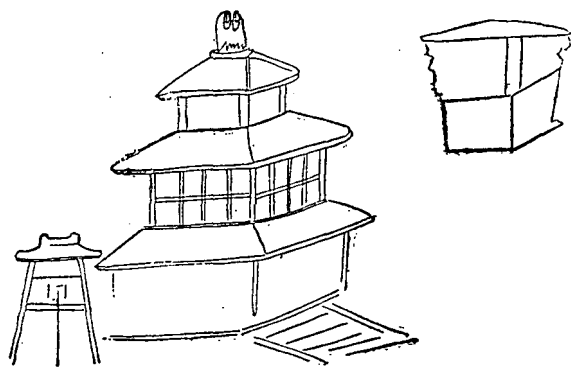


圖7 棒臺子一號墓、住宅の圖（後回廊南壁）

は不詳。屋根頂部に三色の裝飾を描いているというが、形状は詳らかでない。後方に付屬屋、前方に柱二本の井戸を描く。棒臺子二號墓 一號墓と同様の構造で、壁畫内容も類似している。後室後壁に建物の圖がある。周圍を圍い塀でとり圍んだ中に、三階建に見える建物と小さな井戸があり、圍い塀には内開きの門扉が描かれている。建物は、間口三間で、屋根は寄棟らしく、鳥の頭のような棟端飾りをつけているという。中層は身舎より外方へ突出し、ちようど裳階のように周圍にめぐらされた形で、初層中央間には上層へのぼるはしごが描かれている。門の近くに配され、はしごを描いていることから見て、住宅の廳堂ではあるまい。上層裳階部分を周囲でできる防衛用の望樓であろうか。

北園漢墓 同じく遼陽の石槨墓で、建築圖は、三重樓閣（東廟東壁）、住宅（東・北耳室）、官庫（南耳室）がある。樓閣圖は、朱の柱、水色の壁・黒の瓦屋根を描く大きなもので、上層の棟には鳳凰を描き、上・中層は朱塗りで窓を描き、軒には垂木の表現が見られる。初層の柱につよい内轉びが見られ、のちの『營造法式』では側脚とよばれる手法の古い例として注目される。住宅は帷幔の内に神人を描き、官庫には「代郡庫」と記されるが、いずれも簡単な描寫である。

迎水寺漢墓 やはり遼陽の石造槨室墓。住宅の軒先に鳥・魚・獸を吊した簡単な庖厨圖がある。南雪梅一號墓 同じく遼陽の石造槨室墓。單線で黒の屋根、朱の柱、下部に高欄あるいは腰壁のような赤い格子のある建物を描く。

密縣打虎亭二號墓 中室東がわ頂部に蓮花・格子・唐草・菱形紋の格天井を描く。

三道壕・張君墓 遼陽の石造槨室墓。墓主の住宅内部の狀況を簡單に描く（圖8）。内部を左右二つに分け、それぞれ上部に帷幔を描く。左の方は中央の柱によって二分され、左に墓主、右に一人の夫人の牀にのった姿を描いており、中央の柱の上には大斗をのせ、下には獸を象った礎盤

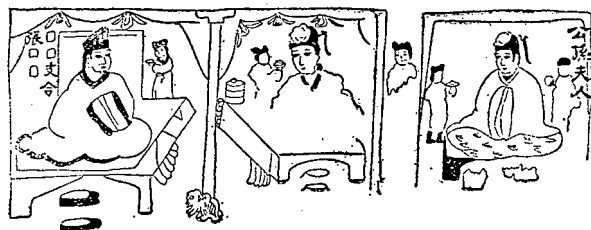


圖8 遼陽三道壕・張君墓、住宅内部の圖（小室右・後壁）

が見える。これは、建築部材をとり入れて日常的な状況を展開圖風に描いた、比較的早い例に屬する。

雲南昭通・霍承嗣墓 東晉・太元十一年から一九年（三八六—九四）の間の墓葬であることが、墨書により知られる。石造、寶形の墓室の四壁に多くの壁畫がある。建築圖は四件ある。東壁の圖は、「廡」と記された重層で袴腰はかまこしをもった闕と、その右に重層（二階建に見える）寄棟造の建物を描く（圖9）。後者の重層建築と同様な圖が西壁にもあり、これには下層中央の入口部分に「龍樓」の墨書がある（圖10）。この兩者はともに、ちようど寄棟屋根の上にもうひとつ寄棟造の亭をのせたよ

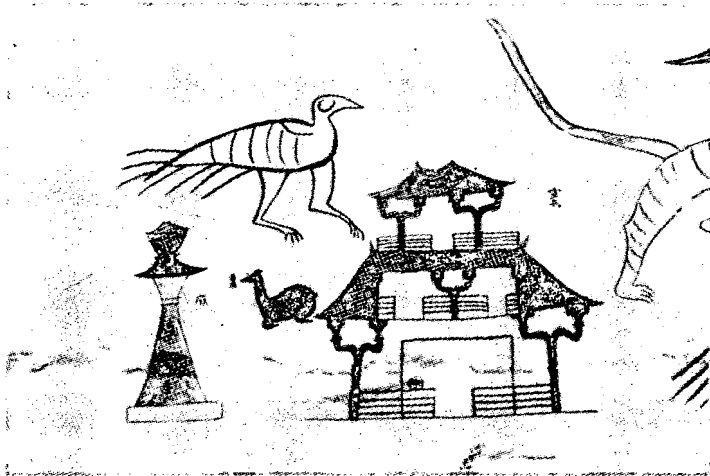


圖9 雲南昭通・霍承嗣墓、闕・樓閣の圖（墓室東壁）

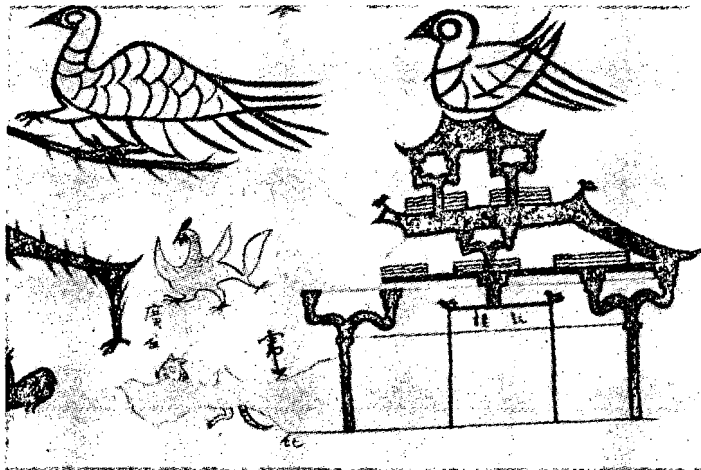


圖10 雲南昭通・霍承嗣墓、樓閣の圖（墓室西壁）

うな形で、下層の屋根の中にあたる部分にも柱や欄杆を描いている。これらの圖の周邊には、「廣雀」と記す三足鳥、人面虎、身獸などが描かれているので、やや非現實的におもえるが、東壁の圖は闕とともに描いており、やはり墓主に關わる建物を表現したものであろう。二つの重層建築は、上層を吹放しにし、欄杆をつくっているところからみて、見晴し用の亭または樓の類に屬するものだろう。中層部

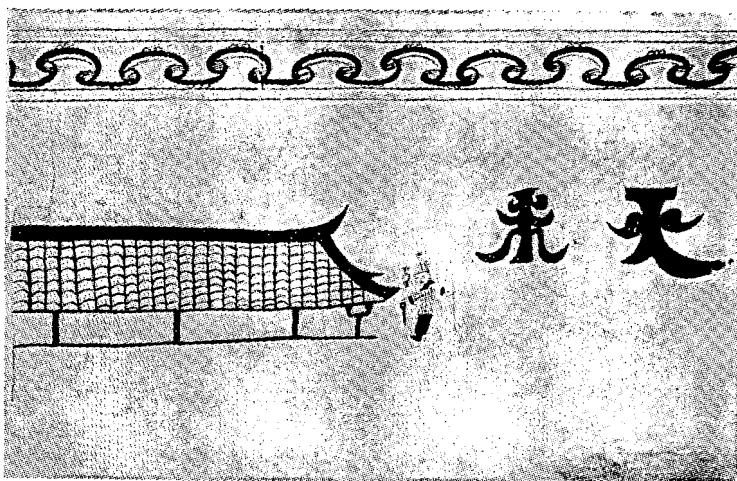


圖11 雲南昭通・霍承嗣墓、寄棟建物の圖（墓室南壁）

分の解釋は問題であるが、東壁の圖が隅柱を表わしているところからみると、内部の狀況を表現したものと考えることもできる。すなわち、現存する建物でいえば、獨樂寺觀音閣（河北薊縣・遼・九八四）³²や、住宅では徽州一帶の明代の住宅に多く見られるような、二階中央部の床を吹抜けにして高欄をめぐらした形式が想定される。二つの圖とも、柱上には彎曲した肘木の双斗^{ふたつと}があり（東壁上下層と西壁上中層は大斗がなく、枝分れた柱のように描く）、南壁に見える寄棟造の細長い建物の隅柱にもやはり双斗がある。また東壁下層、西壁上層の斗は一種の皿斗^{さうと}のようなものが見える。双斗は、後漢末の沂南畫象石墓の獨立柱をはじめ、漢代に例があるが、のちには姿を消し、三斗^{みつと}が一般的になる。しかし、『釋名』釋宮室には、

斗は、欂^と（肘木）の兩頭にあつて、〔計量器の〕斗のような形のものである。³⁴とあり、張衡「西京賦」の吳・薛綜の注にも、

欂（肘木）は、柱上の曲った木で、その兩頭に櫨（斗）を受けるものである。³⁵というように、ほんらい双斗が正統的な形式であった。漢以降むしろ特殊なものとなる點では皿斗も同様である。これらの手法は、のちの南方の保守的様式を考えるうえで、ひとつの示唆をあたえるものといえよう。

以上に紹介した漢から六朝にかけての建築圖は、墓主の生前の活動を表現するための題材として描かれたものがほとんどであり、ひとつひとつの場面のなかで、比較的簡単な描寫であつかわれている。このなかでは、和林格爾後漢墓の疑似

架構圖と遼陽三道壕張君墓の住宅内部の展開圖的表現が、つぎにのべる唐代の遺構の表現手法と若干共通するところがあるといえよう。

なお、以上のほか、壁畫古墳としてとりあげなかったもののうちで、表現手法の近似した例を二、三あげておく。まず、沂南畫象石墓の中室天井には彩色を施した格天井の畫象石があり、この種の實物としては最古の例である。また、楊官寺畫象石墓（後漢初期）の墓室正面に浮彫された樓閣圖は、柱と斗拱のみ赤く塗っていると報告されており、地上の建築の朱塗りの構造材を表現した、もっとも早い例に屬する。このほか、壁畫の代わりに帛畫を用いたもので、前漢前期の長沙馬王堆三號墓の壁にかけられた帛畫に、建物の圖があるというが、詳細はなお不明である。

二 隋唐時代の壁畫古墳とその構成

つづいて、隋唐時代の壁畫古墳の實例についてのべることにする。現在知られる隋唐時代の壁畫古墳の遺構は、二四件にのぼる。これらの墓室構成、壁畫の題材と位置、棺槨の形式などについて一括したものが〔表2〕である（各遺構の引用文獻は末尾に一括して掲げる）。なお唐代にも壁畫の代わりに絹畫をかけた例が見られるが、やはりここでは除外した。また、すでに失われたものも除外した。

隋唐時代の壁畫古墳は、現在知られる遺構が陝西省西安付近を中心に分布していることもあって、構造から壁畫の題材、配置などにいたるまで、きわめて類型的な特徴をもっている。唐代壁畫古墳については、すでにしばしば紹介されているので、個別の遺構の説明は〔表2〕にゆずることにし、ここでは壁畫古墳の構成の特色をあげてみたい。

ここにあげた二四件の遺構は、隋開皇二年（五八二）のものから晩唐大中元年（八四七）のものまでであるが、本格的な壁畫

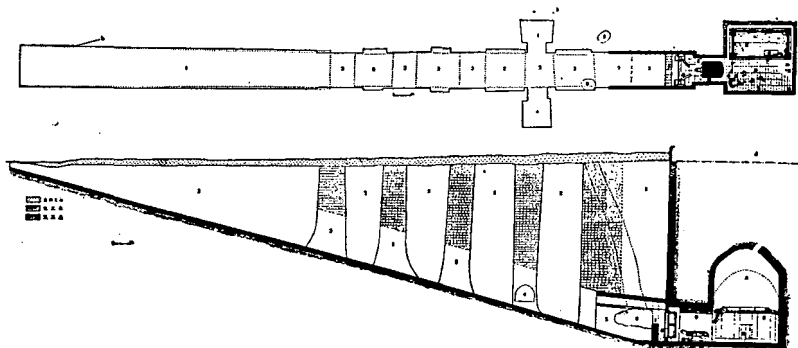


圖12 李壽墓. 平面圖・斷面圖

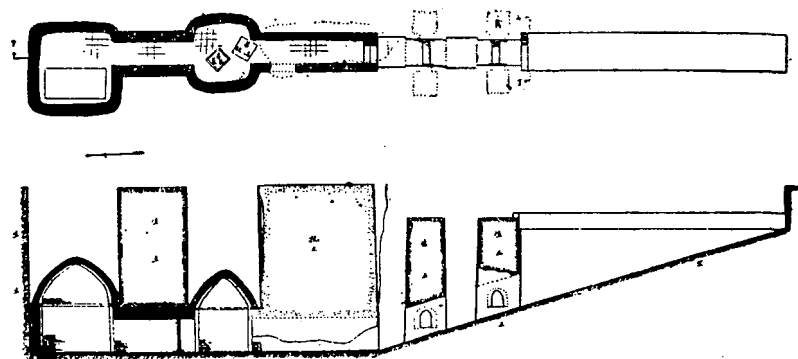


圖13 韋洞墓. 平面圖・斷面圖

を有するものは、初唐から盛唐までに集中している。これらの古墳の構成は、年代による差はそれほど認められない。すなわち、墓室は一つのもので、前後二室のものとがあるが、いずれも地表から斜路の墓道を地下に掘りすすみ、その間に天井を敷か所設け、墓門の付近から墓室までの中心部を平坦につくる。中心部の上にあたるには墳丘を築く。墓室から墓室へいたる古墳の中軸線は南北方向にとる。すなわち、古墳の全體は、地上の建物と同じように南向きとなる。頂部の構造は、墓室部分はドーム狀實形持送り、甬道・墓道部分はヴォールトになる。構造材は、甬道（二墓室のばあい前甬道）より奥の中心部分を磚、他をつきかためた土とするものと、すべてを土造とするものがあるが、簡略な配置のいくつかを除いて、ほとんどが前者の形式をもつ（圖12、13）。

壁畫の題材は、漢・六朝と同様にさまざまな内容を含んでいるが、もっとも一般的なものあげれば、人物、天象、四神、建築、武器、山水などがある。人物圖は、墓道・甬道・過洞・墓室の各東西壁面に描かれ、内容としては侍女や男侍の群像、儀仗隊、車馬出行、舞樂・雜伎の圖などがあるが、各壁面にまとまった構圖をもって描かれる群像圖は、もっと

壁 畫 古 墳

墓 主	所 在	墓葬年代	古 墳 の 構 成				壁 面 内 容	棺 槨	注
			区 分	幅 (m)	長さ (m)	高さ (m)	構 造 材		
李 和	隋, 上柱國德威公 (周書29, 北史66)	陝西省三原縣雙盛村	開皇2 (582)	墓 道		全 37.55 口 15	土		陝西省文物管理委員會 1966
				天井 (5) 過洞 (4)	上1.35 (口) 下1.43 1.3	上3.1-3.5 下1.4 (口) 3.15-3.35	1.9-2.2	土 土	
				甬 道	1.5	3	2	土 (甬道) 土 (甬道)	
李 壽	開府儀同三司上柱國, 淮安郡王唐高祖李淵從弟	陝西省三原縣陵前公社焦村生產隊	貞觀4 (630)	墓 道	2.30	16.8		土 ?	陝西省博物館・文物管理委員會1974 c 同1974 d 外文出版社1974
				過洞 (4) 天井 (5) 甬道 (2)	2 2.40 1.05-1.90	1.8-2.6 下 深 1.1-2.24 1.30-1.90	2.46 5.5-9.5 1.5-2.5	土 土 土	
				甬 道	1.86	4	2.30	磚 (甬道)	
				甬 道	1.40	2.8	1.90	磚 (甬道)	
				墓 室	3.95	3.8	不詳 (墳)	壁: 磚 頂: 土	
缺 失 奉 節	常寧府果毅突厥人, 缺失恩力子	陝西省長安縣郭杜鎮 (1號墓)	顯德3 (685)	墓 室		形 制 不 詳		北) 舞女	賀梓城1959
鄭 仁 泰	右武衛大將軍	陝西省扶風縣煙柳公社馬寨村	麟 德 元 (664)	墓 道	2.5	口17	北深 5.2	土 ?	陝西省博物館禮泉縣文教科局墓群組1972
				過洞 (5) 天井 (5) 甬道 (2)				土 土 土	
				墓 室	1.36	1.8	1.4	磚 (甬道) 磚 (甬道)	
李 爽	鎮西光祿大夫守司刑太常伯	陝西省西安市羊頭鎮 (1號墓)	總 章 元 (668)	墓 道		全 20.6	深 7.8		陝西省文物管理委員會 1969 a
				天井 (3) 過洞 (3) 甬道 (2)					
				墓 室	4.3	3.9	6.5	磚 (甬道) 磚 (甬道)	
趙 澄	山西省太原市新龍如村工地	萬歲登封元 (696)	神 龍 2 (706)	甬 道				形制不詳	折英濤・杜仙洲・陳明達1954 a 同 b, 山西省文物管理委員會1965
				甬 道	3.65	3.6	3.4	磚 (甬道)	
永 泰 公 主 李 仙 意	唐中宗第七皇女 (新唐書83)	陝西省乾縣乾陵陪陵	神 龍 2 (706)	墓 道	3.5-4.5	23.35		夯土	武伯倫1963 人民美術出版社1963 陝西省文物管理委員會 1964, 北川1969 外文出版社1974
				過洞 (5) 天井 (6) 甬道 (8)	2.7 3.3	2.1		出入口, 磚 他, 夯土 (券) 夯土 (券) 夯土 (券)	
				前甬道	4.9	4.7	5.35	磚 (券)	
				後甬道		7.25		磚 (券)	
				後 室	5.3	5.4	5.5	磚 (券)	
章 懷 太 子 李 賢	唐高宗武則天皇帝第二子 (新唐書81, 舊唐書86)	陝西省乾縣乾陵陪陵	神 龍 2 (706)	墓 道	2.5-3.3	20		夯土	陝西省博物館・乾縣文教科局墓群組1972 a 李求是1972 陝西省博物館・文物管理委員會1974 a 外文出版社1974
				過洞 (4) 天井 (4) 甬道 (6)	2.2-2.4 1.8-2	2.7-3.4 3	2.8-3 9-12	土 土 土	
				前甬道	1.7	14	2.1	磚 (券)	
				前 室	4.5	4.5	6	磚 (券)	
				前甬道	1.7	9	2.1	磚 (券)	

〔表2〕 隋 唐 の

主 名	所 在	第 年 代	古 墳 の 構 造 材				壁 面 内 容	棺 槨	注 記		
			区 分	幅 (m)	長さ (m)	高さ (m)					
懿德太子李重潤	唐中宗長子 (舊唐書86, 新唐書81)	陝西省乾縣 乾陵陪陵	神龍2 (706)	墓 道	3.9	26.3		夯土	東) 儀仗隊、青龍、城、闕、山、樹 西) 儀仗隊、白虎、城、闕、山、樹、北) 欄	陝西省博物館乾陵文獻 局唐墓墓誌銘1972 b 李重潤是1972 王仁波1973 傅嘉年1973 陝西省博物館文物管理 委員會1974 b 外文出版社1974	
				過洞 (6)	2.44	3.72	3.15	下) 夯土 上) 磚、土坯	I - III) 欄、II, 東) 西) 內侍		石槨 3X2 所藏頂
				天井 (7)	3.75	2.85	深 1.8.5 V 15	夯土 (西)	I 東) 戟架, II 東) 車、人物 I - III) 柱、枋、額、斗拱 (儀仗、什器 etc をおく)		
				小龕 (8)	1.8	1.8		夯土 (西)			
				前甬道	1.60	20.30	2.39	磚 (券)	東) 西) 宮女, 頂) 半臺		
				前室	4.45	4.54	6.3	磚 (穹隆)	四) 柱、枋、額、斗拱、東) 西) 宮女群像 南) 宮女伎樂供		
李 潤	唐中宗弟	陝西省長安縣 南里王村	神龍2 (708)	後甬道	1.68	8.45	2.29	磚 (券)	東) 西) 宮女, 頂) 半臺	石槨 3X2 所藏頂	
				後室	5.3	5	7.1	磚 (穹隆)	四) 柱、枋、額、斗拱、頂) 跟河系 (東) 金鳥、西) 龍隊		
				墓 道	口底 2.2 2.2	15.3	1.6	下) 生土 上) 土坯、磚	東) 西) 柱、枋、額、斗拱、東) 青龍、朱雀 西) 白虎、朱雀		陝西省文物管理委員會 1959 b
				過洞 (2)	1.45	全 4.6	5.5	夯土			
				天井 (2) II	1.6-1.8 1.8-2	1.8-2	2	夯土 (牆門)	墓門上部) 欄、東) 西) 人物?		
				小龕 (4)	0.7-0.9	0.8-0.9		夯土			
前甬道	1.45	7.3	0.5-1.5	磚 (券)	東) 西) 人物?						
薛 氏	唐高祖太子李建成次女	陝西省咸陽市 底張溝 (4號墓)	景雲元 (710)	墓 道	2.5	15.3	1.6	下) 生土 上) 土坯、磚	東) 西) 柱、枋、額、斗拱、東) 青龍、朱雀 西) 白虎、朱雀	石槨 3X2 所藏頂	
				過洞 (2)	1.45	全 4.6	5.5	夯土			
				天井 (2) II	1.6-1.8 1.8-2	1.8-2	2	夯土 (牆門)	墓門上部) 欄、東) 西) 人物?		
				小龕 (4)	0.7-0.9	0.8-0.9		夯土			
				前甬道	1.45	7.3	0.5-1.5	磚 (券)	東) 西) 人物?		
				前室	3.4	3.3	4.5	磚 (券)	四) 長方形格柵、花卉、飛禽、樹木		
薛莫·史氏	右驍衛大將軍	陝西省咸陽市 東郊經一東路	開元16 (728)	墓 道	3.95	3.98	4.89	磚 (券)	東) 西) 柱、枋、額、斗拱、東) 青龍、朱雀 西) 白虎、朱雀	石槨 3X2 所藏頂	
				過洞 (2)	1.45	全 4.6	5.5	夯土			
				天井 (2) II	1.6-1.8 1.8-2	1.8-2	2	夯土 (牆門)	墓門上部) 欄、東) 西) 人物?		
				小龕 (4)	0.7-0.9	0.8-0.9		夯土			
				前甬道	1.45	7.3	0.5-1.5	磚 (券)	東) 西) 人物?		
				前室	3.4	3.3	4.5	磚 (券)	四) 長方形格柵、花卉、飛禽、樹木		
薛 氏	唐高祖太子李建成次女	陝西省咸陽市 底張溝 (4號墓)	景雲元 (710)	墓 道	3.95	3.98	4.89	磚 (券)	東) 西) 柱、枋、額、斗拱、東) 青龍、朱雀 西) 白虎、朱雀	石槨 3X2 所藏頂	
				過洞 (2)	1.45	全 4.6	5.5	夯土			
				天井 (2) II	1.6-1.8 1.8-2	1.8-2	2	夯土 (牆門)	墓門上部) 欄、東) 西) 人物?		
				小龕 (4)	0.7-0.9	0.8-0.9		夯土			
				前甬道	1.45	7.3	0.5-1.5	磚 (券)	東) 西) 人物?		
				前室	3.4	3.3	4.5	磚 (券)	四) 長方形格柵、花卉、飛禽、樹木		
薛 氏	唐高祖太子李建成次女	陝西省咸陽市 底張溝 (4號墓)	景雲元 (710)	墓 道	3.95	3.98	4.89	磚 (券)	東) 西) 柱、枋、額、斗拱、東) 青龍、朱雀 西) 白虎、朱雀	石槨 3X2 所藏頂	
				過洞 (2)	1.45	全 4.6	5.5	夯土			
				天井 (2) II	1.6-1.8 1.8-2	1.8-2	2	夯土 (牆門)	墓門上部) 欄、東) 西) 人物?		
				小龕 (4)	0.7-0.9	0.8-0.9		夯土			
				前甬道	1.45	7.3	0.5-1.5	磚 (券)	東) 西) 人物?		
				前室	3.4	3.3	4.5	磚 (券)	四) 長方形格柵、花卉、飛禽、樹木		
薛 氏	唐高祖太子李建成次女	陝西省咸陽市 底張溝 (4號墓)	景雲元 (710)	墓 道	3.95	3.98	4.89	磚 (券)	東) 西) 柱、枋、額、斗拱、東) 青龍、朱雀 西) 白虎、朱雀	石槨 3X2 所藏頂	
				過洞 (2)	1.45	全 4.6	5.5	夯土			
				天井 (2) II	1.6-1.8 1.8-2	1.8-2	2	夯土 (牆門)	墓門上部) 欄、東) 西) 人物?		
				小龕 (4)	0.7-0.9	0.8-0.9		夯土			
				前甬道	1.45	7.3	0.5-1.5	磚 (券)	東) 西) 人物?		
				前室	3.4	3.3	4.5	磚 (券)	四) 長方形格柵、花卉、飛禽、樹木		
薛 氏	唐高祖太子李建成次女	陝西省咸陽市 底張溝 (4號墓)	景雲元 (710)	墓 道	3.95	3.98	4.89	磚 (券)	東) 西) 柱、枋、額、斗拱、東) 青龍、朱雀 西) 白虎、朱雀	石槨 3X2 所藏頂	
				過洞 (2)	1.45	全 4.6	5.5	夯土			

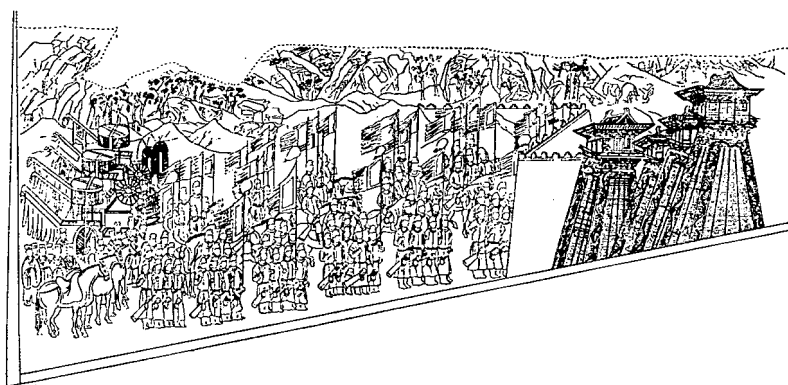


圖14 懿德太子墓・儀仗隊・関楼の圖（墓道東壁）

も特徴的なもののひとつである。日・月・星を描く天象圖は、例外なく墓室の頂部の寶形持送り部分に描かれ、二墓室の両方に描くものもある。四神圖は、墓道東西壁面に描くものと、墓室四壁（上部）に描くものがある。建築圖は、實際の架構を模して柱・桁などを描くものと、獨立した樓閣などを描くものがある。武器は、多くのばあい戟架を描き、侍衛群像とともに表現するものもある。山水風景は、車馬出行圖、城壁、儀仗隊などの圖の背景として描かれるものが多い。このほかにも格天井などの文様、家畜、狩獵などの圖があるが、詳細は「表2」に委ねる。これらの壁畫の主題は、いうまでもなく墓主の生前の事蹟と關連させて、その榮華を表現したものがほとんどである。壁畫主題のあつかいかたには、すでにのべた六朝以前の例と同様に、壁面一面、ないしそれ以上にわたって、ひとつまたは連續する主題を描くものがあるのに加えて、壁面をちょうど展開圖に見たてて、墓室の空間的構成になぞらえたかたちで配置する手法がある。その端的な例をあげれば、懿德太子墓の墓道の東西兩壁に、ちょうど城門から張り出した闕を象って、左右對稱に描かれた闕樓の圖と、それに連なる儀仗隊、戟架、背景となる山水などを描いたものである。これらの壁畫は、單なる墓室裝飾としてだけでなく、より空間的な効果を得ようと意圖したものにはかならない。同じように、柱・桁・斗拱などを實際の壁面の構造材に假託させた擬似架構圖は、のちにあげるようにきわめて類型的な表現手法となっているが、これらは、柱と柱の間の空間に侍女の群像などを描くことによって、死者のための内部空間としての墓室に、より具象的な効果をあたえようとしたものとみることができ。さ

らに、天を象ってドーム狀實形に積まれた墓室頂部には日・月・星が描かれる。これらが一體となって、墓道から墓室にいたるまでの空間は、純然たる内部空間でありながら、きわめて具象的な性格を帯びる結果となる。繪畫を用いて、實際の墓室構造になぞらえた表現を試みることは、すでにのべたように漢代からいくつかの例がある。すなわち、墓門兩脇に門卒を描くもの、墓室頂部に天象圖を描くもの、墓室構造になぞらえて柱・桁を描くものなどが、それである。しかし、これらは部分的な表現であり、壁畫あるいは畫象全體が墓室空間の構造と對應するものではなかった。漢代の畫象石墓には、むしろ墓室構造材したいが裝飾的に處理されているものがあるが、唐代の壁畫古墳は、平面構成や墓室構造は單純化させながら、空間的な表現を壁畫に委ねているのである。これは、唐代壁畫古墳の、壁畫の處理におけるひとつの大きな特色といえるだろう。

三 唐代壁畫古墳の建築圖

つぎに、唐代の壁畫古墳のうちで建築圖をもつ遺構についてのべることにする。建築圖をもつ遺構は、全部で一〇例を數えるが、開元一六年（七二九）合葬の薛莫・史氏合葬墓を除くと、ほかは初唐・中唐時期（七世紀前半―八世紀初頭）に屬している。以下、各遺構の建築圖をあげていくことにする。

李壽墓 單墓室の磚造墓で、貞觀四年（六三〇）の墓葬。建築圖は、かなりの數にのぼる。もともと詳細なものは、第一、二、三、四過洞および甬道の各南壁に描かれた樓閣圖のひとつ、第一過洞南壁（すなわち墓道北壁）の圖である（圖15）。三重の樓閣を中央に描き、左右に小さな二重の方閣を對稱的に配し、その間を空中の廊で結ぶが、左右の方閣は壁隅で墓道東西壁へ半分折れ曲って描かれる。間口は各層とも五間^{けん}で、中・上層は中の間を裏棧唐戶^{うらさんからど}（版門）、脇の間各二間^{にんじまど}を連子窓とする。

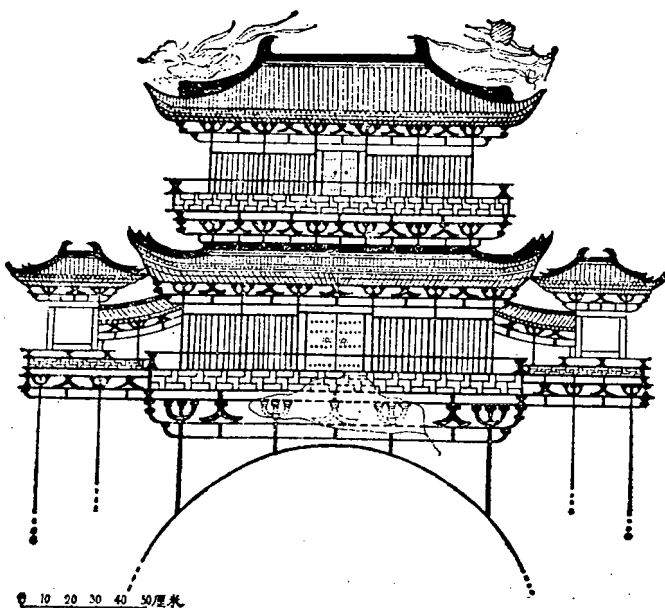


圖15 李壽墓。樓閣の圖（第一過洞南壁）

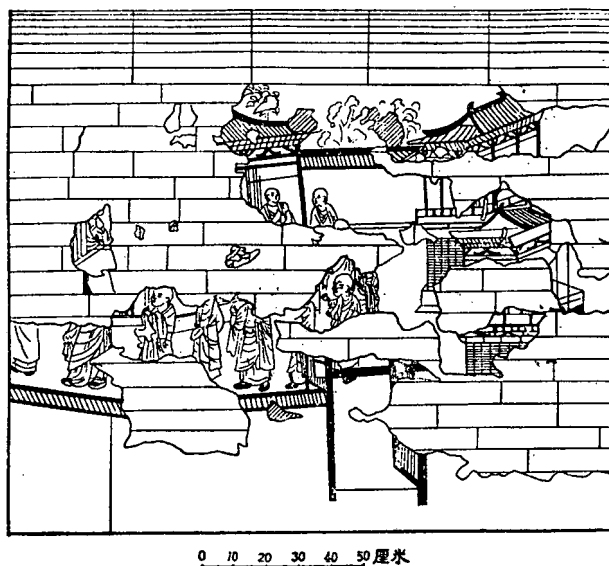


圖16 李壽墓。佛寺の圖（後甬道東壁）

中・上層には^①崩し高欄をめぐらし、下に腰組をもつ。軸部は柱と二重の頭貫（以下、兩層闌額という）で固め、斗拱は、いずれも柱上を三斗、中備を人字形臺股とする。隅斗拱は二手先（双抄偷心）に見える。高欄、連子窓構えの描寫にはやや省略がおこなわれているらしい。中央の樓閣、方閣とも本瓦葺で大棟兩端に鴟尾をもち、軒は二軒、平行垂木に見える。報告は、左右に張り出した方閣を闕の一種と見ているが、後述の懿德太子墓闕樓圖のような、高い磚造または土造、石造の闕身をもった防衛用の闕とは別の系統の樓閣あるいは門樓と見るべきものであろう。この圖のように下層を吹放しにした樓閣は、

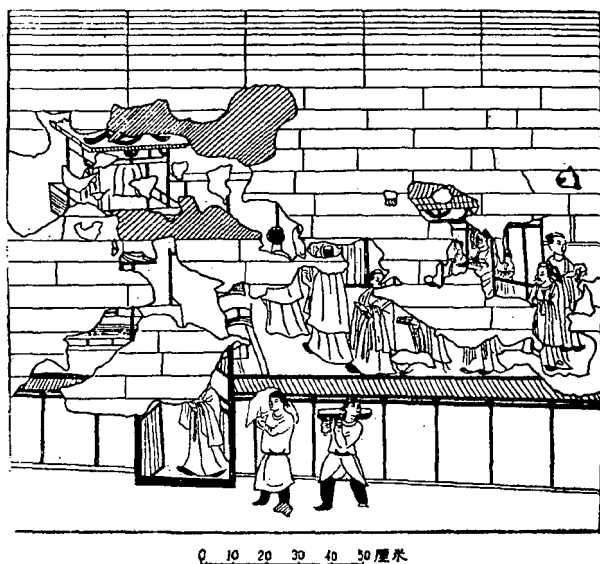


圖17 李壽墓、道觀の圖（後甬道西壁）

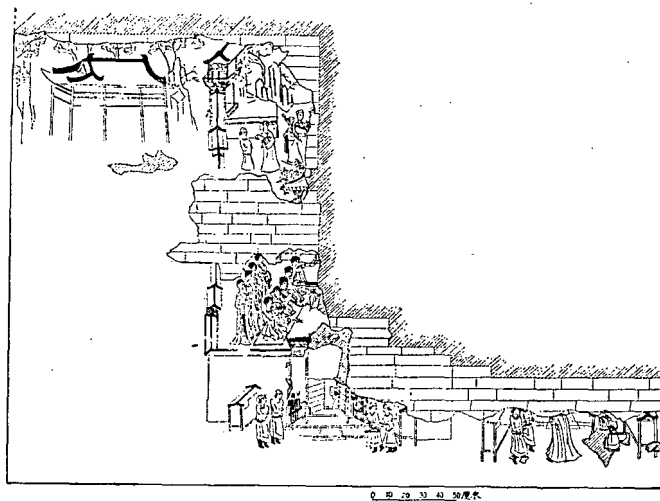


圖18 李壽墓、貴族住宅、樂舞の圖（墓室北壁）

敦煌莫高窟二一七號窟西方淨土變の圖などにも見られ、實際に存在した形式と考えられる。つぎに破損の著しい佛寺の圖（圖16）は、圍い塀の中に、磚積みの臺上に建つ入母屋造の樓閣二棟と中心的建物らしい一棟が見えるが、やや判然としない。入母屋の建物は鴟尾が見え、兩層闌額、三斗、人字形墓股が確認できる。同じく破損の及んだ、これと對稱の位置に描れる圖（圖17）は、發掘報告には道觀の圖とされるもので、圍い塀の中に、比翼入母屋造のような、上層に鐘を吊る樓と、もう一棟の建物が見えるが、細部の三斗・間斗束・兩層闌額が確認できるにすぎない。墓室北壁の圖（圖18）は、貴族の住

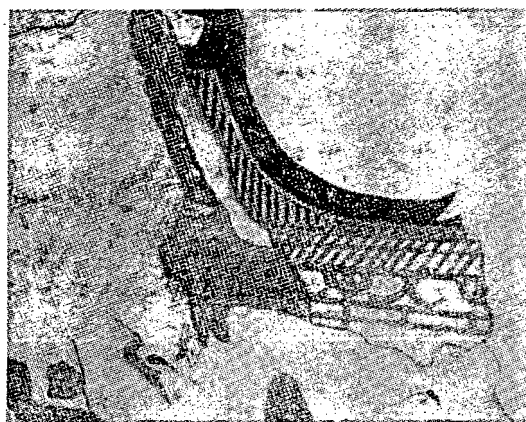


圖19 李壽墓，建築圖殘片（第三天井の剝落）



圖20 李爽墓，群像圖（甬道および墓室の東壁）



圖21 李爽墓，群像圖（墓室北壁）

宅における樂舞を描いたものらしいが、主屋は描かれていない。圍い塀と、それにとりつく門樓、その外に下部が不鮮明な入母屋造の建物が見える。このほかにも二階建の建物、馬屋、飼料小屋などの圖があるという。

李爽墓 同じく磚造の單室墓で、總章元年（六六八）の墓葬。報告によると、墓門の外の東西に朱色の宮殿が描かれていたが、發掘作業中に破損した。それ以外の建築圖は、甬道東西壁、墓室四壁に描かれた柱・桁^け・斗の擬似架構圖があり（圖20、21）、各柱間に一人ずつ侍女を配している。架構は、柱・頭貫・桁よりなり、他の遺構圖のように斗拱はなく、ただ



圖22 趙澄墓. 斗栱圖 (墓室壁)



圖23 永泰公主墓. 侍女群像圖 (前室東壁)

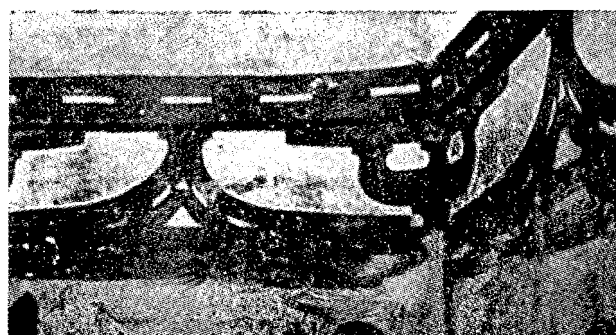


圖24 永泰公主墓. 斗栱圖詳細 (後室)

大斗・束のみを描く。

趙澄墓 同じく磚造の單室墓で、萬歲登封元年（六九五）の墓葬。墓室四壁に、赤・黄・黒の三色で擬似架構圖を描き（圖22）、その柱間に男侍、侍女を描く。架構は、粽ちまきのある隅柱と頭貫・桁よりなり、斗拱は柱上が三斗、中備が實肘木さねひじきつき人字形臺股、柱間中央に二本の柱を合わせた間柱まばしらが見える。



圖25 永泰公主墓、關樓圖斷片（墓道東壁）

永泰公主李仙蕙墓 乾陵の陪陵のひとつで、神龍元年（七〇六）陪葬。二墓室の磚造墓で、建築圖は、關樓圖・格天井圖案、および擬似架構圖がある。關樓圖は、墓道東西壁に描かれたもので、墓門から左右前方に伸びた長い城壁の圖に連なり、實際の構造になぞらえたものである。現在は、復原模寫の繪が掲げられ、寶形造の樓が高い磚造の闕身の上に建つ姿が鮮明に描かれているが、報

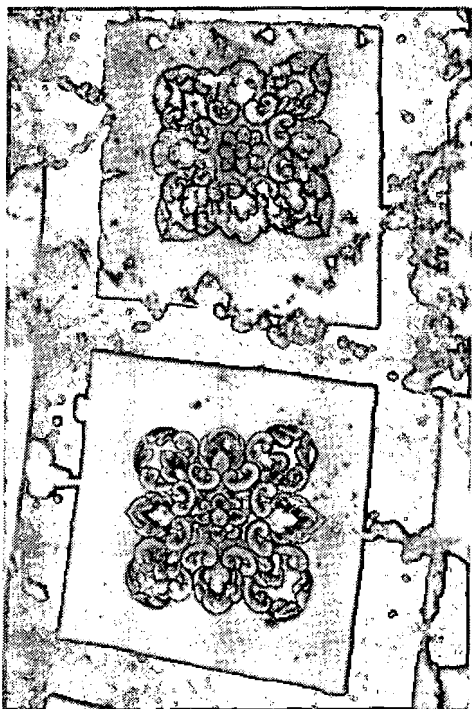


圖26 永泰公主墓、格天井圖案（前甬道頂部）

告によると破損は甚だしく、高欄周囲の部分のみ比較的保存がよかったらしい(圖25)。この闕樓は母闕のみの單闕形式になり、上層は四周に^④崩し高欄をめぐる。高欄の下には劒頭文の裝飾がつけられている。墓門前方左右の壁には長い城壁を背景にして儀仗隊が描かれており、これらの壁畫配置は、後述の、より保存のよい懿德太子墓のばあいと基本的には同様である。ヴォールト頂部の格天井を象った圖案は、第三過洞、前甬道にあり、中に寶相華文を描く(圖26)。擬似架構圖は、墓道中途の四つの天井の東西兩壁、前室・後室の四壁に見える。前室四壁の擬似架構圖は、四隅に隅柱、壁面中央に間柱を描き、柱上には大斗の上に兩層闌額と同様の二重の桁を置いて、さらに三斗・實肘木の柱上組物を重ね合せ、中備に墓股を置く。その上に、寶形ドーム起點となる磚に合せ、もうひとつ二重の桁を描いている。各柱間には侍女らの群像を配する(圖23)。後室は、柱・兩層闌額の上に、柱上は三斗・實肘木、中備は人字形墓股を置き、ドーム起點に合せてさらに二重の桁を置いている(圖24)。人字形墓股は、二重材のように描かれる。

章懷太子李賢墓 同じく神龍元年陪葬の乾陵の陪陵。二墓室の磚造墓で、壁畫配置は前者と類似している。建築圖は、いずれも擬似架構圖で、第一・二・三・四過洞は兩層闌額のみ、前室・後室の四壁は、隅柱・中柱と兩層闌額、斗拱、桁を描き、柱間には



圖27 章懷太子墓、擬似架構圖(前室壁・模寫)

侍女や樹石を配する。斗拱は、柱上が三斗・實肘木、中備が二重材のように描かれた人字形墓股である（圖27）。

懿德太子李重潤墓 同しく神龍元年陪葬の乾陵の陪陵。二墓室の磚造墓で、構成は前二者と酷似している。建築圖は、すでにふれたように、墓道東西兩壁に對稱形に描かれた長い城壁と闕樓の圖、第一過洞南壁の建築圖斷片、および擬似架

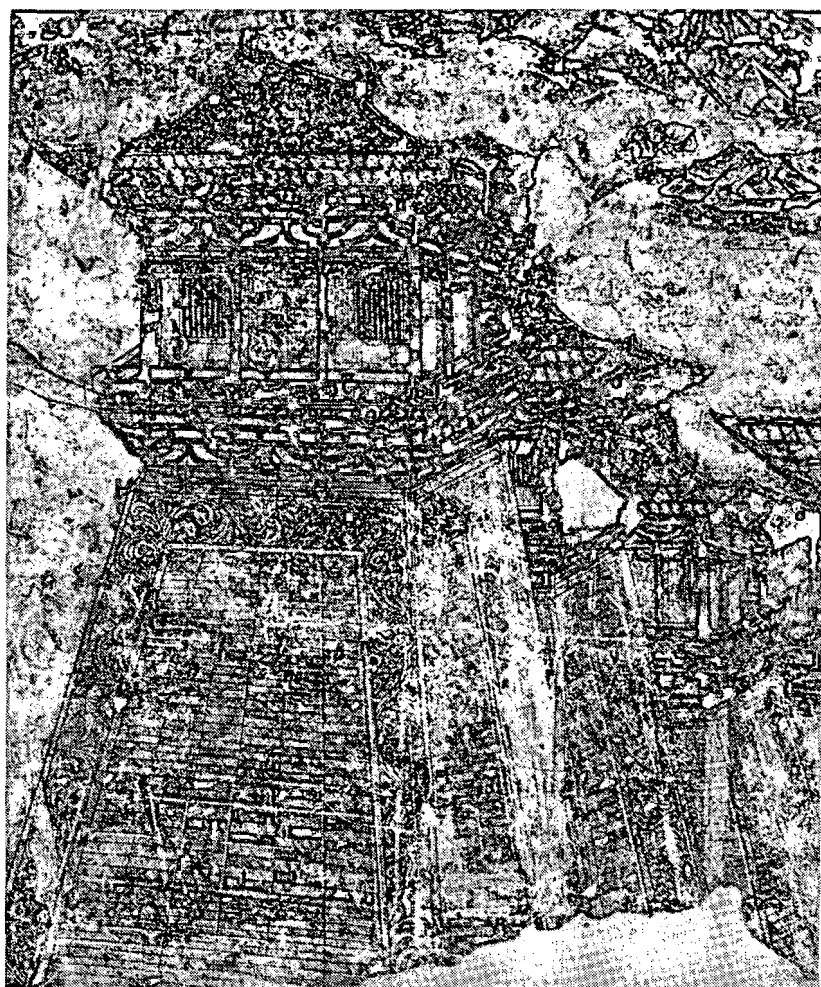


圖28 懿德太子墓、闕樓詳細（墓道西壁）

構圖、格天井圖案がある。闕樓圖は、ここで扱う建築圖のうちで、もっとも詳細な表現をもったものである（圖14、28）。この闕樓は、城壁にとりついた母闕から前方四五度方向へ連續的に張り出した三つの子闕を左右對稱に付設させた三出闕形式になる。母闕、子闕ともに、それぞれ高い磚積みらしい闕身の上に、大棟に鴟尾を置いた本瓦葺・寄棟造の樓をのせた形である。上層は方三間で、周圍一間通りを吹放しとし、外周には唐草文の腰羽目板を嵌めた縁・高欄をめぐらし、下に腰組をそなえる。身舎の間は裏棧唐戸、兩脇間は連

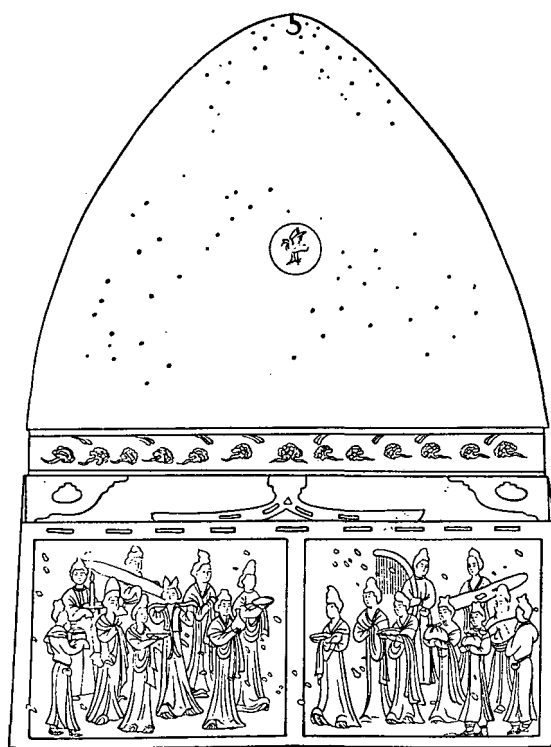


圖29 懿德太子墓。宮女群像圖（後室東壁）

子窓になる。軒は二軒・平行垂木で、軸部は粽をもつ柱と兩層闌額で固める。斗拱は、軒、腰組とも、柱上は二手先（双抄偷心）、中備は人字形臺股の上に二つの間斗束を置き、隅は丸桁組手下に寶瓶を置く。なお、身舎、庇とも方三間という構成は、

技法的にはやや不自然さが否めず、つぎの例（圖30）を参照すると、繪畫のために表現の省略がなされている可能性があるとおもわれる。母闕に連なる城壁は、つき固めた土造のようで、上に凸字形ひめがきをのせる。一方、第一過洞南壁（墓道北壁上部）には建築圖の殘片が見える（圖30）。この圖は下半部が殘存するだけで判然としないが、間口五間の主屋の兩脇には廊が描かれている。主屋は身舎三間の周圍に吹放しをめぐらした間口三間で、報告によると單層寄棟造であることは

中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について

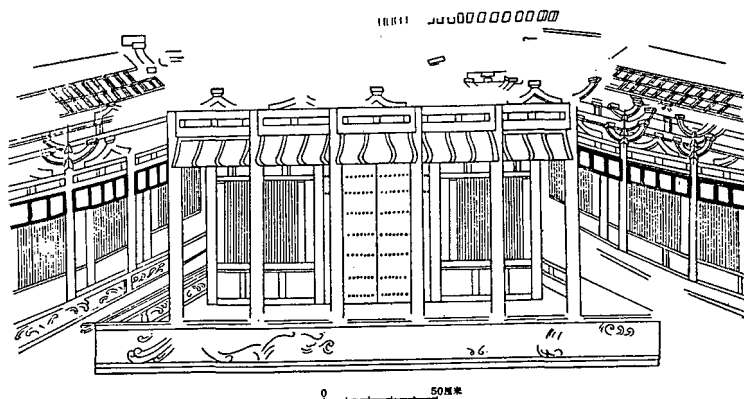


圖30 懿德太子墓。建築圖斷片（第一過洞南壁上部）

わかるらしい。身舎は中の間を裏棧唐戸、脇の間を連子窓とする。斗拱は、中備の人字形墓股が確認できるが、柱上は不詳。兩層闌額は見える。左右の廊は、この主屋のある一郭をとり圍む回廊の一部であることは明らかであり、その側柱より一間内側通りに連子窓を描いているのは、これが複廊式であることを窺わせる。回廊の斗拱は、柱上が二手先（双抄儉心）で、上にもう一手肘木をもち、中備が人字形墓股を上下二段の間に二つの間斗束をはさむ形式であり、軒裏が露出される形式と考えられる。軸部は兩層闌額。墓門や入口アーチ上部壁に建築圖を描くのは圖15、圖32と同様で、壁畫配置の形式から見ると、報告にいうように宮城門を象ったものとするのが自然であるが、この圖のばあい主屋・回廊とも下部に波紋を描いた高欄を廻している。この形式はのちの住宅・園林とも共通するが、さらに、兩者のレベルは同一のようであり、

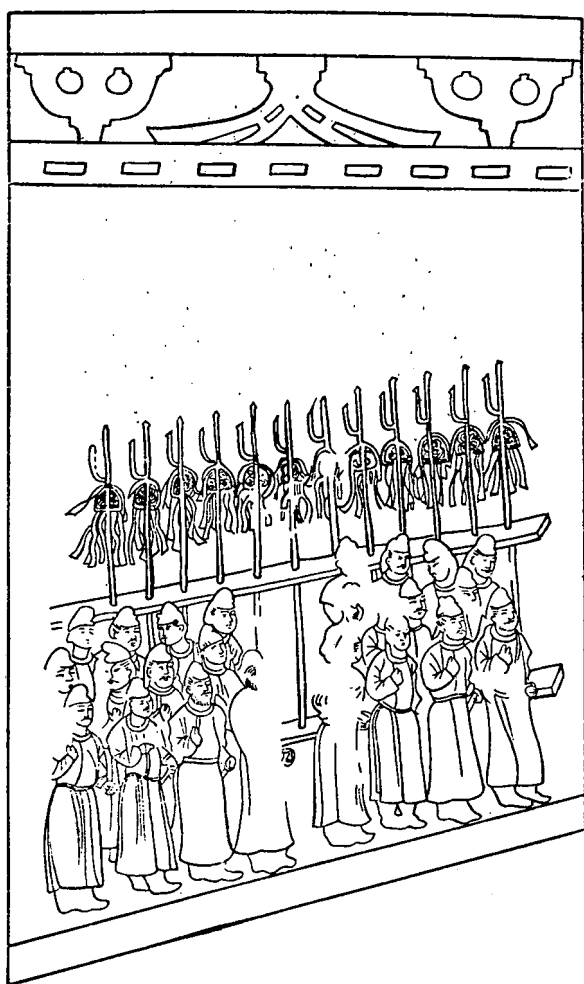


圖31 懿德太子墓。戟架・侍衛圖（第一天井東壁）

門樓と見るのはやや抵抗が感じられる。下部との關係が不詳であるから明確でないが、あるいは墓主の日常的建築または宮城内の一郭を表現したものであることも考えられよう。

つぎに、擬似架構圖は、他の例と同様、群像圖と一體になったもので、二つのタイプがある。ひとつは、柱・兩層闌額・桁の構成で、斗拱は柱上を三斗・實肘木、中備を人字形墓股にするタイプであり、前室と後室

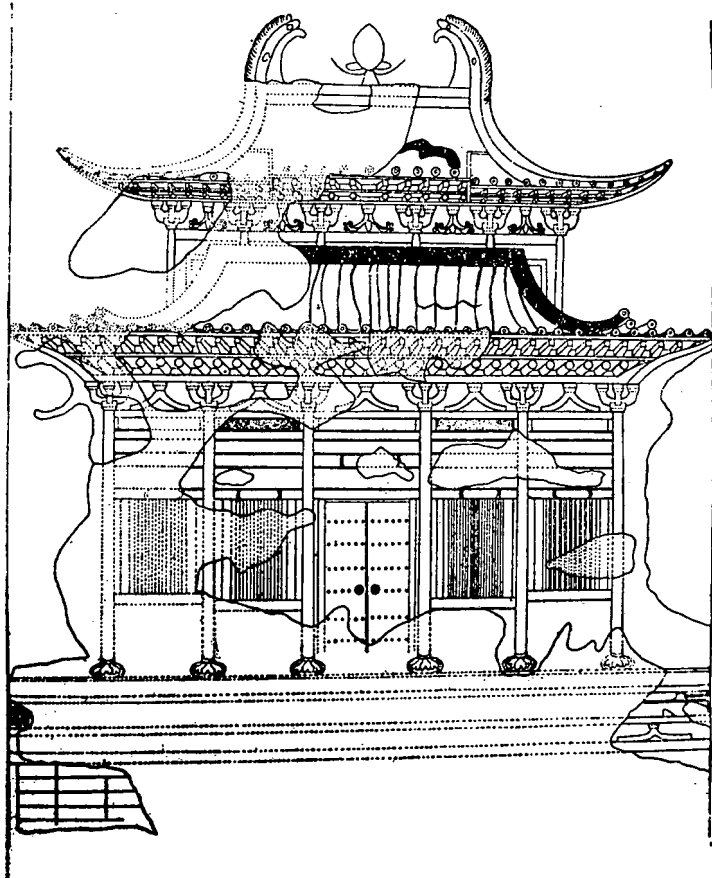


圖32 韋洞墓。樓閣圖（墓門上部壁）

の四壁および第一・二・三天井^{てんせい}の東西壁がこの形式に属する（圖29、31）。もうひとつは兩層闕額のみを描くもので、第一・二・三過洞東西壁にある。このほか、前甬道と後甬道のヴォールト頂部には格天井^{くわてんじやう}の圖がある。

韋洞墓 二墓室の磚造墓で、景龍二年（七〇六）の墓葬。建築圖は、墓門上部に描かれた建築圖と、墓室壁の擬似架構圖がある。墓門上部の圖は下部が破損していて不詳であるが、磚積みの基壇あるいは高い臺の上部に、人字形墓股をもった

高欄が見える（圖32）。全體的な構成と墓門ア

ーチとの位置關係が明らかでないので判定は困難であるが、下部の磚積みのように見える部分が、高い臺を表現したものであれば、敦煌莫高窟壁畫、『清明上河圖』、『武經總要』などに見え、明清の北京城にあるのと同様に、下層を磚積みとした宮城の門樓を象つたものと考えられる。上の木造部分は、後方に、大棟兩端に鴟尾、中央に寶珠をのせた本瓦葺・寄棟造の部分が見え、その前方にやはり本瓦葺の部分が描かれている。前方の屋根は後方の頭貫上端にとりついているように見える。そのように見れば、前方部分は身舎^{みや}にさしかけられた張り出した庇^{ひさし}に相當し、凸字形複合

平面をもつ門樓の早い例として注目される⁽⁴⁶⁾。前方部分は、中の間を裏棧唐戸、脇の間各二間を連子窓とし、柱は蓮瓣を造り出した礎石あるいは礎盤の上に建ち、上部を兩層闌額でつなぐ。後方部分は頭貫一本のみになる。斗拱は、前後ともに柱上が三斗、中備が人字形墓股であるが、後方は人字形墓股がかなり裝飾化された形になっている。軒は、前後とも、いわゆる地圓飛方^(地垂木が圓形、飛檐垂木が方形の断面)の二軒平行垂木であることが明瞭にしめされている。擬似架構圖は、墓道東西壁と後室四壁にある(圖33、34)。後室のものは四隅に柱・三斗を描き、それを桁と兩層闌額で繋ぎ、中備には横の擴がりの大きい人字形墓股を描く。

金勝村四號墓 單室磚造墓で、報告によると墓室四壁に柱・三斗・人字形墓股・頭貫・桁が描かれているらしいが、詳細は不明である。

金勝村六號墓 同じく單室磚造墓で、墓室の棺床より前の部分の東西壁に擬似架構圖がある(圖35、36)。隅柱と三斗形式の斗拱、中備の人字形墓股、頭貫、桁が見える。

薛莫・史氏合葬墓 開元一六年(七八)の合葬で、磚造單室墓である。墓室四壁に擬似架構圖がある。壁面を二間に分



圖33 韋洞墓、斗拱圖(後室西南隅)

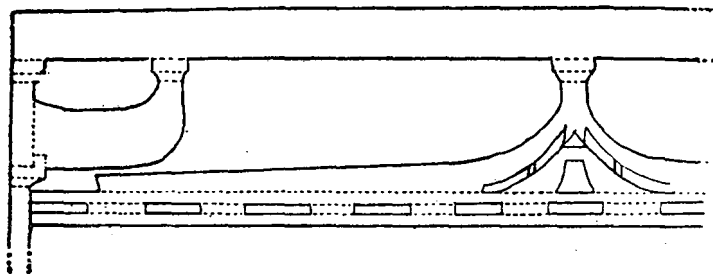


圖34 韋洞墓、斗拱圖(後室東壁北部)



圖36 金勝村6號墓. 白虎・日・月・斗拱(墓室壁・頂)

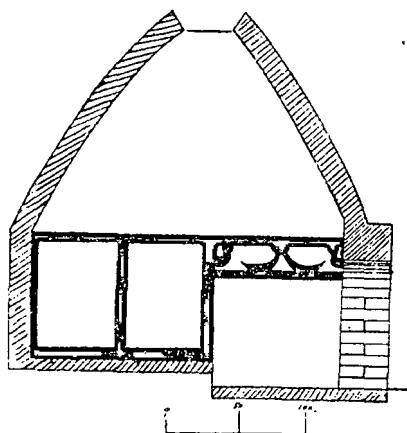


圖35 金勝村6號墓. 斷面圖

け、柱上に三斗、中備に人字形墓股の裝飾化したものを描く。頭貫は兩層闌額で、下に間柱が描かれている(圖37)。

以上のほか、擬似架構圖とよく似た手法として、壁面に格子枠組を描き、その中に人物や題材を配した例がある。隋開皇二年(五八二)墓葬の李和墓、初唐時期の金勝村五號墓、盛唐・中唐期(七世紀中—八世紀中)の阿斯塔那六五—三八號墓に見られるが、かならずしも架構圖の省略化したものとはいえないだろう。また、建築圖ではないが、天寶一五年(七六五)墓葬の高元珪墓には、上部に唐破風曲線



圖37 薛莫史氏合葬墓. 柱・桁・斗拱の圖(墓室壁)



圖38 高元珪墓. 墓主と椅子の圖

の蓋いをつけた椅子^{いす}が見られる(圖38)。椅子の古い實例であるとともに、唐破風曲線の淵源を知る貴重な資料として注目される。

四 唐代初期の建築様式・技法の二、三の特徴

以上に列挙した壁畫古墳の建築圖は、時期的には唐代の初期(初唐—盛唐・七世紀中—八世紀最初)に集中している。繪畫であるため、平面や空間構成の面で知りうる場所はすくないが、反面、建築様式や細部の技法の面では稀有の資料といえる。描かれた建築のモデルとしては、墓主の生前の活動と關連づけて、城壁・闕樓、宮殿の門樓、および貴族住宅などを想定したものと考えられる。しかし、ここに慈恩寺大雁塔佛殿圖(圖3)を加えてみると、まず、彼此の建築類型による様式上の差異はごくすくないことに氣づく。中國のばあい、そうした差異があまり顯著でないことは、現存する宋代以降の建築にも反映されているが、『洛陽伽藍記』に、永寧寺の佛殿・樓門・圍い塀を傳えて、

塔の北に佛殿が一棟あり、そのつくりは太極殿に似ていた。……寺の圍い塀はすべて短い垂木を架け、上を瓦で葺いてあり、いまの宮殿の塀のようだった。その四面に一つずつ門が開かれていた。南門の門樓は三重で、三階建ての回廊とそれぞれつながっていた。高さは地上二〇丈あった。その形式は、いまの端門(宮殿の南門)と似ていた。

④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
㉖
㉗
㉘
㉙
㉚
㉛
㉜
㉝
㉞
㉟
㊱
㊲
㊳
㊴
㊵
㊶
㊷
㊸
㊹
㊺
㊻
㊼
㊽
㊾
㊿
というように、宮殿建築と佛教建築の様式上の差異は、もともと明確ではなかったようである。その意味では、ここに掲げた城郭・宮殿・貴族住宅の系統に屬する建築のもつ様式・技法上の特徴は、かならずしも特定の類型の建築に限定されるものではなく、ある程度、普遍的な性格をもつと考えてよいだろう。つぎに、外觀・平面および構造・技法の各要素から、共通する特徴を抽出してみることにする。

屋根 全體的な外觀の特徴として、まず、本瓦葺・寄棟造の屋根が壓倒的に多いことがあげられる。これらの大棟の兩端には鴟尾がのせられている。寄棟造は、中國建築の屋根形式のうち、もっとも古くから確認されるもので、『周禮』考工記に傳える殷の重層建築、『逸周書』作雒解にいう太廟・宗宮・考宮・路寢・明堂はいずれも「四阿」と記されるが、前者の鄭玄の注に「四阿というのは、いまの四注造の建物のようなものである」とあり、それが寄棟造をしめすものと考えられる。⁽⁴⁸⁾ 主要な記念的建築に寄棟造を用いるという原則は、いらい明清時代にいたるまで、基本的には守られていたようである。唐代も例外ではなく、しばしば引用される史料であるが、日本の『倭名類聚抄』に引く開元二五年（七三七）の營繕令に、

宮殿はすべて寄棟造で、鴟尾をのせる。

と見えている。⁽⁴⁹⁾ 鴟尾をのせることは、村田治郎氏の研究に明らかなように、東晉以降にはじまる手法と考えられる。⁽⁵⁰⁾ なお、永泰公主墓をはじめとして、墓室内の石槨も間口三間の寄棟造とする例がすくなくない（表2）。一方、これらの建築圖のうち、李壽墓の佛寺圖には、入母屋造の建物が二棟見える。入母屋造は、唐代においては、寄棟造につぐ第二級の屋根形式として規定されたものである。すなわち、『唐會要』卷三一の太和六年（八三三）の詔に引く開元二五年（七三七）の營繕令には、王公以下の者は、住宅には重栱（二手先のような複雑な斗栱）や藻井（化粧天井）をつくってはならない。三品以上の者は、建物は五間九架を越えてはならない。その主屋は厦兩頭とする。門屋は五間五架を越えてはならない。五品以上の者は、建物は五間七架を越えてはならない。その主屋は厦兩頭とする。門屋は三間兩架を越えてはならない。……⁽⁵¹⁾

とある。ここに厦兩頭というのは、李誠『營造法式』大木作制度二・陽馬（隅木）^{すみぎ}の項に、
およそ堂や廳（主屋）はいずれも厦兩頭の造りにする。すなわち、兩端の間に隅木を用い、〔折屋によって〕二本折り繼ぐ垂木を架けおろす。

とあり、續く原注に、漢ではこれを九脊殿といい、『唐六典』および「營繕令」に定めているのはこの形式である、としている。⁵² この記述は、入母屋造の妻の部分の屋根架構を説明したものにはかならず、九脊殿というのも、棟が九つの建物、すなわち入母屋造である。したがって、開元の營繕令において、王公諸臣の住宅の主屋の形式は、天子の宮殿が寄棟造であるのに對して、第二級の入母屋造に規制されていたことがわかる。壁畫に見える建築に寄棟造が多いのは、ひとつには宮殿・城郭などを題材にしているためであろうが、あるいは開元以前にはこの種の規制がおこなわれていなかったことも考えられる。

平面 壁畫の描寫は外觀、とくに正面を主にしているため、平面構成の上で知りうるところはすくない。ただ、懿德太子墓の建築圖殘片（圖30）や闕樓圖などに見られる特徴は、周圍一間あるいは前面一間を吹放しにしていることである。この種の平面構成は、晩唐以降の現存する佛寺や道觀の遺構に見られるものであるが、⁵³ 單層・重層を問わず、宮殿・城郭でもひろく用いられていたことが知られる。貴族住宅と推定されうる圖は、懿德太子墓建築圖殘片（圖30）くらいしかないが、墓室四壁の侍女群像圖などは、おそらく墓主の日常的世界を表現したものとおもわれる。そこに、柱間に群像を配した圖が描かれているのは、墓主の住宅においても、この種の吹放し空間が一般的に用いられていたためではないかと推定される。そのように見れば、圖29のような吹放し列柱の外周に高欄をめぐる形式が、ひとつのモデルとして考えられるであろう。

軸部構造 やはり内部が描かれていないので詳細は明らかでないが、かなり明確な特徴を指摘できる。すなわち、柱と上部の兩層闕額による軸部構成である。兩層闕額については、横振れ防止材に關連して論じたことがあるので、⁵⁴ 重複を避けることにするが、この手法は壁畫の建物の圖および擬似架構圖をつうじて顯著な共通の特徴のひとつとなっている。このうち、より具體的な描寫をとまなうのは、大雁塔佛殿圖を含めて、懿德太子墓闕樓圖、韋洞墓樓閣圖であり、いずれも

それぞれ獨立した性格をもつようになり、李誠『營造法式』では、上の材を闌額、下の材を由額と稱し、およそ由額（飛貫）^{ひめき}は、闌額（頭貫）^{かしらぬき}の下に施し、その高さは闌額の高さより二分ないし三分小さくする。と規定される形式に發展している。⁽⁵⁸⁾

軒^{のき} 軒の手法は、すでにのべたように二軒^{ふたのき}の平行垂木が一般的である。とくに大雁塔佛殿圖、韋河墓樓閣圖には、地圓飛方の明確な描寫が見られる。周知のように、軒の垂木配置には平行垂木と扇垂木の二種類がある。現存遺構では、晩唐

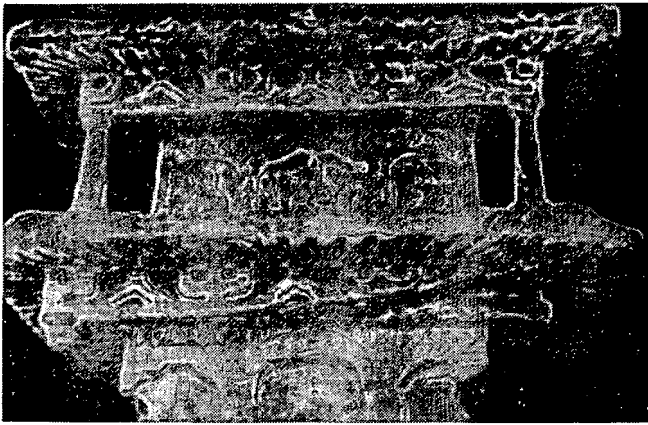


圖40 雲岡石窟第2窟塔細部

除外するとしても、獨樂寺觀音閣（河北薊縣、遼・九八四）以降、構造上合理的な扇垂木が壓倒的に主流を占め、『營造法式』大木作制度二・椽（垂木）^{たるき}の項も、平行垂木の短椽（配付垂木）^{はいつけ}は名稱をあげるだけで、すべて扇垂木の記述に費している。扇垂木の手法じたいは、楊府君石闕（四川綿陽）、高頤石闕（同雅安・二〇九）など、後漢の石闕より見られるが、これらは一軒・圓垂木の疎らな扇垂木である。より本格的な扇垂木の手法は、北魏の雲岡石窟二窟の四角柱塔（圖40）、同六窟九重塔柱などに見える。一方、中國の平行垂木の遺構はきわめてすくなく、石造では河北省定興縣石柱（北齊・五六七—七〇）が六朝期の稀例である。また敦煌莫高窟の浮彫建物はやや省略している可能性があるが（たとえば北魏の二七窟の闕）、降って壁畫の建築圖では、隋代以降、五代のものまで、一軒または二軒の平行垂木である。また炳靈寺三號窟の唐代の石塔は、木造建築を模したもので、地圓飛方の二軒平行垂木をもつ。⁽⁵⁹⁾ 一方、實物ではないが、魏の何晏「景福殿賦」に、

爰に禁楯有り。勒分翼帳す。承くるに陽馬を以てし、接くるに員方を以てす。

という句がある。唐の李善の注は、

楯は、陽馬にとりつける短い垂木である。……勒分翼帳とは、獸のあばら骨のように分かれ、鳥の翼のように左右に張っているさまを言ったものである。陽馬は、四隅の長い桁である。禁楯が並べられて、それを陽馬で承け、そのたぐさんの材料をつなぐのに員方があったのである。……

①。陽馬は、寄棟四隅に引き出される長い材、すなわち隅木のことであり、『營造法式』大木作制度二にも用いられている用語である。すなわち、李善の解釋は、この句は、屋根隅を見上げたとき、配付垂木が隅木の左右に整然と配付けられているさまを詠んだもので、員方は木負のことと見たのである。これによって、魏の景福殿が平行垂木であったことが推定されると同時に、李善の時代には、木負を用いる、すなわち二軒・平行垂木の建築がすくなくなかったことがわかる。扇垂木の手法は、のちに繼承されているところからみても、唐代に廢絶したものとは考えられない。扇垂木と平行垂木という二種類の手法が併行していたと考えざるをえないが、唐代初期に主流を占めたのは平行垂木であった可能性が大きい。

腰組・高欄 樓閣で腰組をもつものが、懿德太子墓闕樓圖、李壽墓樓閣圖に見られる。腰組の存在は、漢の家型明器から見られ、高樓建築には當然おこなわれたことが推定されるものである。問題は細部的なおさまりであるが、兩者ともに腰組斗拱は軒斗拱と同様の形式とし、腰組下には柱上にのる斗拱が見える。のちの『營造法式』では、柱上に普柏枋（臺輪）をめぐらした上に大斗を置き、その上のおさまりは、又柱造と纏柱造の二種の技法を説明している。しかし、懿德太子墓闕樓圖の腰組は、そのいづれよりも簡單で、柱上に斗拱を積み重ねる形式になる。これは磚積みの闕身ではない一般の樓閣建築にも通用しうる手法であり、唐代初期の重層建築の技法を考えるうえで貴重な資料といえる。

樓の上層四周にめぐらされた高欄には、凡崩し組子を嵌めるものと、唐草文の腰羽目板を嵌めるものがあるが、いずれ

も、架木・斗束・平桁・地覆の構成がすでに確立していることをしめしている。

斗拱 大雁塔佛殿圖、懿德太子墓闕樓圖、同第一過洞南壁の建築圖斷片の回廊部分に共通するのは、柱上を二手先、中備を間斗束・人字形臺股とする形式である。李壽墓樓閣圖、韋洞墓樓閣圖、および各擬似架構圖は、これより簡略な形式で、柱上を三斗、中備を人字拱とする。まず、より複雑な前者より見ていくと、柱上の二手先斗拱は、先端に秤肘木を置くだけの儉心で、晩唐の佛光寺大殿と比較すると、きわめて素朴である。その差異の最たるものは、ひとつは尾垂木（昂）のないこと、もうひとつは計心斗拱が未發達なことである。しかし、これをただちに初唐と晩唐の様式的變化に結びつけるのは輕率であろう。斗拱の形式が建築の格を反映するものであることは、後世の遺構や『營造法式』によっても窺えるし、前掲の開元二五年「營繕令」に、王公以下の諸臣の住宅に重拱を用いることを禁じているのも、その一例である。したがって、より本格的な記念建築では、これよりも複雑な形式の斗拱が用いられたことを想定するべきである。そこで、これらの問題をも含めて、最初に、尾垂木の手法をとおして考えていくことにする。

尾垂木の木造の實例として最古のものは、法隆寺金堂（日本奈良・七世紀後半）であり、玉蟲厨子（同・七世紀末か）がこれに次ぐ。両者はともに雲形肘木と一體になった特殊な形式である。これよりも一般的な斗拱形式に組み込まれたものとしては、實物ではないが、敦煌莫高窟の壁畫の佛殿圖がある。すなわち、もともと初期の例は、盛唐期とされる一七二號窟北壁西方淨土變圖の中央の佛殿で、やや明確でないが、柱上は四手先（双抄双下昂）計心、隅（四五度方向）は五手先（双抄三下昂）、中備は二手先（双抄儉心）らしい。中唐期の一四八號窟西方淨土變圖の佛殿もほぼ同様であり、この形式は五代の二三六號窟、二三七號窟にまで續いている。尾垂木の形状は先端を殺ぎ落した形であり、全體の構成は、いずれも木割の細さを除けば佛光寺大殿と共通するところが多い。ところで、このような二本の尾垂木（双下昂）の形式がさらに早くから存在したことは、傳熹年氏が指摘している。すなわち、前述の總章二年の明堂に關する詔のなかに、「下柳七十二枚」「上柳八十四枚」の記

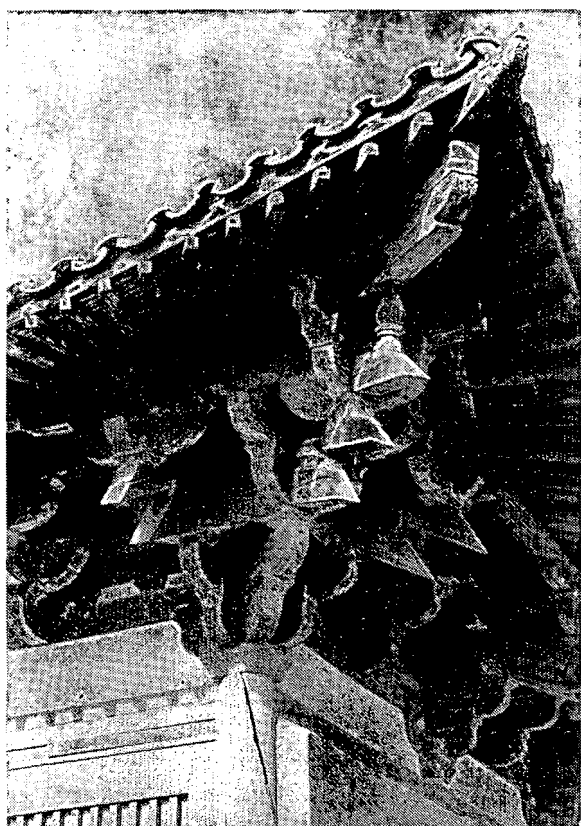


圖41 佛光寺大殿隅斗拱

述があり、柳はのちにもふれるように『營造法式』にいう昂、すなわち尾垂木に通ずると考えられる。傅氏は、側柱數三六本と對應させることによって、この明堂は尾垂木二本の形式であったと推定しているが、問題は、この部材員數では、いずれにしても隅の斗拱が四五度方向にのみ伸出することにならざるを得ないことである。⁶⁵ 周知のように、後世の遺構は、隅斗拱を前・隅・側の三方向に伸出する形式になる(圖41)。隅斗拱を斜方向にのみ伸出するのは、日本に見られる雲形肘木のもの(法隆寺金堂、玉蟲厨子など)を除くと、洛陽博物館所藏の洛陽附近出土という隋代の殿閣陶藏がそうであり、吐魯蕃阿斯塔那の貞觀七年(六三三)沒の張雄と垂拱四年(六八八)沒の妻麴氏の合葬墓(二〇六號墓)、長壽二年(六九三)墓葬の張懷寂墓(五〇一號墓)より出土した木造部材によって復原された闕樓明器も同様である。⁶⁷ 壁畫古墳の建築圖では、初唐の李壽墓樓閣

圖が隅の斗拱を三方向に具えてはいるが、隅行のみを二手先としており、むしろこの種の形式に近い。八世紀初頭の懿德太子墓闕樓圖と大雁塔佛殿圖には、すでに三方向の形式が整っている。ところで、この問題については、尾垂木の古い形式をあわせて考える必要がある。すなわち、漢代の家型明器の斗拱形式は、梁鼻を突出させたような形式が多いが、この種のもののうちでは、河南省靈寶張灣後漢墓の二號墓から出土した綠釉陶樓の四隅(圖42)、および同三號墓出土の陶製倉庫の入口兩脇のものが、獸頭を象ったものであるが、のちに

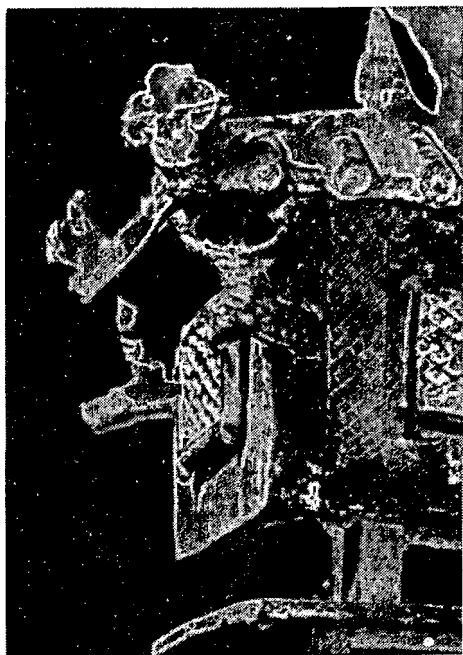


圖42 靈寶張灣二號後漢墓。綠釉陶樓細部

現れる尾垂木先端に三斗・秤肘木を置く形式に比較的近い。⁽⁶⁸⁾前者は隅行のみの斗栱で、漢代明器にはこの種の配置がすくなくない。⁽⁶⁹⁾これに關連するが、何晏「景福殿賦」に、

飛柳 鳥のごとく踊り、雙轆 是れ荷う。

という句があり、李善の注は、

飛柳の形は、鳥の飛ぶ姿に似ていた。また雙轆があつて軒を支承し、それらによつてたくさん部材を擔つていたのである。いまの人は「このような」屋根の四隅の肘木を櫓柳と名づけている。……

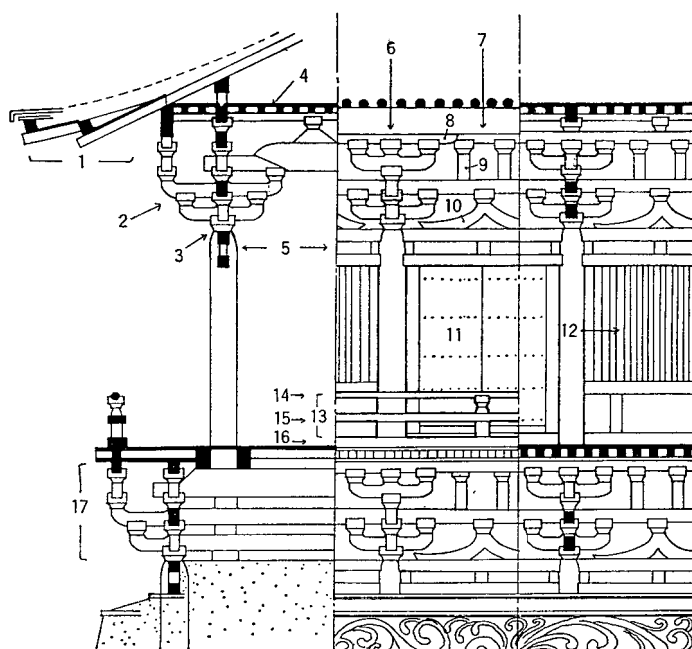
という。⁽⁷⁰⁾飛柳は飛昂に通ずると考えられる。飛昂は、『營造法式』大木作制度一に記されており、尾垂木のことである。雙轆はこれと組になつて軒を支承する、すなわち秤肘木の一つであろう。ここにいう飛柳、雙轆はおそらく圖42のような未完成な形式と推定されるが、問題は李善注によつて、この種の隅行の材を、唐のころ櫓柳と呼んだことがわかることである。櫓は、漢代には楔のことであつたが、李善は同賦「櫓櫓各落として以て相承く」に注して、「櫓は、即ち柳である」といつている。⁽⁷¹⁾つまり、この當時、尾垂木といえは四隅から斜めに出来るものを想定したのである。以上のことからみて、隅行斗栱の技法的な整備が唐代初期におこなわれたことはまちがいあるまい。

一方、計心斗栱の發展についても、資料的に不足するが、ほぼ同様であつたと推定される。二手先斗栱の建築圖のばあい、それが未發達なことが目立つが、三手先以上、尾垂木をもつ本格的形式にも通じていえるかどうかは、なお検討を要しよう。ただ、敦煌莫高窟壁畫の一七二號窟以降のものはすでに計心を具えており、八世紀中頃の日本唐招提寺金堂に傳

えられた三手先（双抄單下昂）は、二、三手目を計心としたものであるから、それ以前に計心斗栱の手法が確立していたことは明らかである。¹⁹

壁畫古墳や大雁塔佛殿圖に見られる二手先斗栱の形式は、尾垂木を有する系統よりは簡略なタイプに屬し、規模や格の低い建築に用いられたものと考えられる。しかし、すでにのべたように、この種の類型的な細部が見られることは、特殊な記念的建築以外では、それがかなり普遍的であったことを示唆している。三斗・人字形墓股のみの形式は、さらに簡略なタイプに屬するが、それらを含めた細部の特徴は、それぞれの時期の建築に共通するものであったと考えられる。初唐の李壽墓を除く八世紀最初の建築圖の特徴をあげると、まず、肘木は上端を殺いだ彎曲した形が多い。ただし大雁塔佛殿圖は直線形なので、これらは、あるいは水線りの表現とも見られる。人字形墓股は、いずれも横開きの大きいもので、北魏の雲岡や同時期の敦煌莫高窟の直線形とは明らかに異なっている。間斗束は柱間寸法に應じて置かれるが、基本的には二本配する形が多い。懿德太子墓斷片圖（圖30）の回廊部分ではその上にさらに人字形墓股が見える。これは、おそらく軒小天井の有無、丸桁の形狀・寸法に關わる差異と推定される。桁の支承に原則として實肘木を用いる點も特徴のひとつである。斗栱形式は必然的に梁や軒のおさまりと關わる問題であり、それにともなうて側回りの關係もある程度推測することができる。その具體的な構成を推察するために、八世紀最初の懿德太子墓闕樓圖上層部分を資料として、二手先斗栱のばあいの側回りのおさまりとして考えられる一案を圖43にしめす。

造作 柱間裝置は、きわめて類型的である。すなわち、中の間を裏棧唐戸、脇の間を連子窓とする。この配置は、墓室内に置く石槨でも同様に線刻によって描かれており、共通した手法となっている。この種の扇構えは、實物では佛光寺大殿の裏面に唐代の墨書のあるものが最古であるが（圖44）、かならずしも唐代に特有のものではない。板戸に饅頭金物を打ち並べる形式であるが、『營造法式』小木作制度一にも版門として規定が記される。連子窓も同様で、漢代明器より類例



1. 二軒（地垂木・飛檐垂木）
2. 二手先〔双抄偷心斗拱〕
3. 粽〔卷刹〕
4. 格天井〔平基天花〕
5. 兩層闌額
6. 柱上組物〔柱頭鋪作〕
7. 中備組物〔補間鋪作〕
8. 實肘木〔替木〕
9. 間斗束〔斗子蜀柱〕
10. 人字形竊股〔人字拱〕
11. 裏棧唐戸〔版門〕（入側柱筋をしめす）
12. 連子窓〔直檻窗〕（同上）
13. 高欄〔欄杆〕
14. 架木〔尋杖〕
15. 平桁〔盆唇〕
16. 地覆〔地袱〕
17. 腰組〔平坐〕

圖43 側回りの構成、推定復原一案（用語は日本語〔中國語〕の順）

が見られ、『營造法式』小木作制度一にも版檻窗と破子檻窗の二種の形式の規定が見えるが、壁畫や線刻の表現は簡略化されているので組子断面までは不詳である。のちに日本に伝えられた形式を参照すると、宋代に破子檻窗とよんだ断面菱形の組子のものであったのだろう。

天井については、建築外觀の圖には見えないが、墓道・過洞のヴォールト頂部などに描かれており、いずれも格天井で、板に彩色を施した形式をしめしている。前掲の開元二五年「營繕令」にいう藻井は、具體的にはこの種のものをさしたものと考

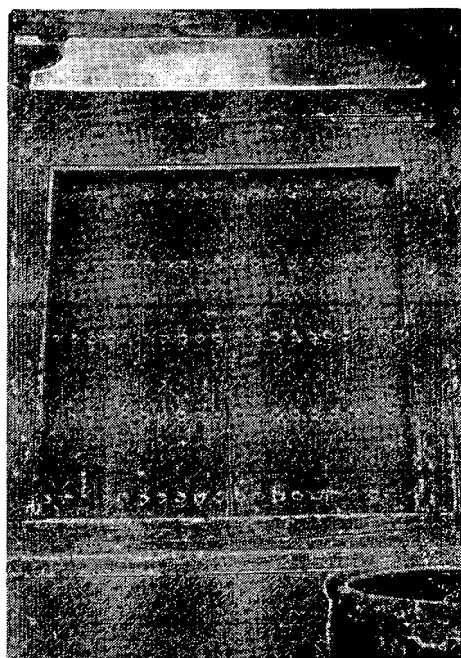


圖44 佛光寺大殿版門

えられる。支輪しりんの有無については確認できないが、敦煌莫高窟には、形状としては同種の折上天井おりあけてんじょう式の構成で彩色を施したものが隋代以降かなり見られ⁽¹³⁾、また晩唐の佛光寺にもあり、日本にも伝えられているところから見て、すでにおこなわれていたと推定される。軒小天井についても不詳であるが、佛光寺大殿には當初存在した痕跡がのこっており、日本にも傳わっている。二手先斗栱の建築圖の丸桁がまぎょうの形状からみても、この形式、およびそれ以上のものでは、すでにおこなわれていた可能性がつよいといえよう。

唐代初期の建築の様式・技法には、以上にのべたように、いくつかの特徴を指摘することができるが、それらは晩唐のものと比較するとかなり大きく隔っている。このような變化がいつごろから起ったものか、限られた資料から判斷することはむづかしい。ただ、軒や斗栱の技法的なおさまりからみると、七世紀中葉と八世紀最初のものとの間にはすでに微妙な差が認められ、八世紀中葉以降のものとの懸隔はさらに顯著である。また、九世紀中葉の佛光寺大殿には、遼代の建築につづく、より本格的な技術革新の萌芽が見られる。このような各時期の間の差が、建築空間あるいは全體的な意匠と結びついた建築思潮の變化を反映したものであるのか、また、それがたとえば初唐様式、盛唐様式というような建築史上の概念規定にふさわしいものであるのかという問題の解明には、さらに別の面からの考察を加えていかなければならない。

五 おわりに

唐代の壁畫古墳に描かれた建築圖をとおして、いくつかの問題を考えてみた。

壁畫古墳で建築圖を題材とするものは、すでに漢・六朝から實例があるが、それらのほとんどは簡単な描寫で、墓主の生前の活動を描く主題の中にとり入れられた外觀の圖である。それに對し、唐代の建築圖は、墓道兩壁の闕樓・城壁の圖

や墓室内の擬似架構圖のように、繪畫による墓道・墓室の空間的表現のための重要な題材となっており、そこには類型的な建築の細部意匠の表現がなされている。その様式的特徴を抽出することによって、たとえば尾垂木・計心斗棋・隅斗棋形式・兩層闌額などの發展整備の狀況をみると、唐代初期の建築の間にも時期的に微妙な様式・技法上の變化があり、のちの盛唐、さらには晩唐のものとの間には、より顯著な差異のあることが明らかになった。

ただし、ここで扱ったのは限られた繪畫資料であり、今後の新資料の發見にともなう修正を要する點がすくなくないとおもわれる。また、盛唐時期の建築の傾向や、唐代全體の建築思潮の變遷については、今後、より廣範な検討をおこなう必要がある。しかし、これらの資料は、じゅうらい具體的印象の乏しかった、この時代の建築の様式・技法の發展變化を考えるうえでは、ひとつの足掛りとなるであろう。

注

- (1) 賀梓城「唐墓壁畫」『文物』一九五九年第八期。
長廣敏雄「唐代の壁畫墓」(『高松塚古墳と飛鳥』所收)、中央公論社、東京、一九七二。
秋山進午「唐代壁畫墓と高松塚古墳」(『高松塚壁畫古墳』所收)、創元社、東京、一九七二。
上田宏範「唐代古墳壁畫と高松塚古墳」(『壁畫古墳高松塚』所收)、奈良縣教育委員會・明日香村、奈良、一九七二。
上原和「章懷・懿德兩太子唐墓壁畫と高松塚古墳壁畫」『古美術』四二號、東京、一九七三。
藪内清「壁畫古墳の星圖」『天文月報』一九七五年一〇月號、東京。
(2) 王仁波「唐懿德太子墓壁畫題材的分析」『考古』一九七三年第六期。
(3) たとえば秦始皇帝の咸陽の宮殿やその陵には銅柱が用いられていたことが知られる(『史記』卷八六荊軻傳、『晉書』卷一〇七石季龍載記
(4) 鐵製、青銅製、あるいは金屬版化粧磚造の佛塔については、J. Needham, *Science and Civilization in China*, vol. 4, part 8, pp. 141-142, Cambridge, 1971.
(5) Oswald Sirén, *Histoire des Arts anciens de la Chine*, vol. 4 *L'architecture*, pp. 77-78, Paris et Bruxelles, 1930.
(6) アレクサンダー・ソーバー氏は「日本東大寺などについて」この點を明記している。
Laurence Sickman and Alexander Soper, *The Art and Architecture of China*, pp. 410-420, Pelican History of Art, Baltimore, 1971.
(7) 梁思成氏は、このとき日本唐招提寺金堂を唐式佛殿の代表例、大雁塔佛殿圖を唐代宮殿の構造をよく表わした例としたが、根據は明らかでない。なお、新資料發見後も、これらの點はあまり明確とはいえない。また、村田治郎氏は「敦煌莫高窟淨土變相圖に見える建築はあまりに

も宮殿風になりすぎているというが、やはり論據は明らかでない。

梁思成「俄們所知道的唐代佛殿與宮殿」『中國營造學社彙刊』第三卷第一期、北京、一九三二。

同「敦煌壁畫中所見的中國古代建築」『文物參考資料』第二卷第五期、一九五一。

村田治郎「東洋建築史」三二九ページ、彰國社、東京、一九七二。

(7) 傳嘉年「唐長安大明宮含元殿原狀の探討」『文物』一九七三年第七期。

(8) 長廣敏雄「漢代畫象の研究」九一—一三ページ、中央公論美術出版、東京、一九六五。

(9) 杉本憲司「中國古代の墓室裝飾」(『壁畫古墳高松塚』所收)、奈良、一九七二。

同「漢代の墓室裝飾についての一試論」(『橿原考古學研究所論集・創立三十五周年記念』)、吉川弘文館、東京、一九七五。

(10) 注(8)。

(11) 『論語』公治長「子曰。臧文仲居蔡。山節藻梲。何如其知也」。何晏『論語集解』「包曰。節者、桺也。刻鏤爲山。梲者、梁上楹。畫爲藻文。言其奢侈」。

桺は、斗のこと。『爾雅』釋宮「桺、謂之案」の郭璞注に「即楹也」とあり、張衡『西京賦』の薛綜注にも「桺、斗也」という。

(12) 『禮記』明堂位、鄭玄注「山節、刻櫨盧(楹)爲山也。藻梲、畫侏儒柱爲藻文也」。

櫨盧は、『說文』に「櫨盧、柱上枿也」とあり、日本でいう大斗。侏儒柱は、李誠『營造法式』大木作制度一に見え、蜀柱、すなわち束のこと。梲がそれをさすことは、『爾雅』釋宮に「宋廟、謂之梁。其上楹、謂之梲」とあり、郭璞注も「侏儒柱也」とする。

(13)

文様としての山、藻の形式については左記を参照。
林巳奈夫「天子の衣裳の(十二章)」『史料』五二卷六號、京都、一九六九。

(14)

『楚辭』招魂「紅壁沙版。玄玉之梁些。仰觀刻桷。畫龍蛇些」。王逸

中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について

『楚辭章句』「言仰觀視屋之榑桷。皆刻畫龍蛇。而有文章也」。

(15) 王逸『楚辭章句』天問・序「見楚有先王之廟及公卿祠堂。圖畫天地・山川・神靈・琦瑋儵佹。及古賢聖・怪物行事」。

(16) 王延壽「魯靈光殿賦」(『文選』卷一一)「圖畫天地。品類羣生。雜物奇怪。山神海靈。寫載其狀。託之丹青。千變萬化。事各繆形。隨色象類。曲得其情」。

(17) 『史記』孝武本紀「又作甘泉宮。中爲臺室。畫天地泰一諸神。而置祭具以致天神」。

(18) 『漢書』卷五四蘇武傳「甘露三年。單于始入朝。上思股肱之美。乃圖畫其人於麒麟閣。法其形貌。署其官爵姓名。…皆有功德。知名當世。是以表而揚之」。

(19) 『後漢書』列傳一二朱祐等傳「永平中。顯宗追感前世功臣。乃圖畫二十八將於南宮雲臺」。

(20) 黃休復『益州名畫錄』卷下「益州學館記云。獻帝興平元年。陳留高昞爲益州太守。更葺成都玉堂石室。東別創一石室。自爲周公禮殿。其壁上圖畫上古盤古・李老等神、及歷代帝王之像。梁上又畫仲尼七十二弟子・三皇以來名臣」。

この種のものについては、張彥遠『歷代名畫記』卷一叙畫之源流に見える。

(21) 『史記』秦始皇本紀「九月。葬始皇鄜山。始皇初即位。穿治鄜山。及并天下。天下徒送詣七十餘萬人。穿三泉。下銅而致椁。宮觀百官奇器珍怪。徙藏滿之。令匠作機弩矢。有所穿近者輒射之。以水銀爲百川・江河・大海。機相瀦輪。上具天文。下具地理。以人魚膏爲燭。度不滅者久之」。

(22) 陸機「挽歌詩」(『文選』卷二八)「旁薄立四極。穹隆放蒼天。側聽陰溝洧。臥觀天井懸。李善曰「古之葬者。於墳中爲天象及江河。陰溝・江河也。天井、天象也」。

(23) 段成式『酉陽雜俎』卷一三尸穿「至開第二重門。有木人數十。張目運劍。又傷數人。衆以棒擊之。兵仗悉落。四壁各畫兵衛之像」。

- (24) 郭寶鈞「潯縣辛村」科學出版社、北京、一九六四。
- (25) 中國科學院考古研究所「輝縣發掘報告」科學出版社、北京、一九五五。
- (26) 杉本一九七五(注9)。
岡崎敬「安岳三號墳の研究」『史淵』第九三輯、福岡、一九六四。
同「漢唐古墳壁畫のながれ」『中華人民共和國漢唐壁畫展』圖錄所收、東京・京都、一九七五。
- (27) 曾昭燏・蔣寶庚・黎忠義「沂南古畫象石墓發掘報告」文化部文物管理局、北京、一九五六。なお同墓前室壁面にも四神圖があるが、朱雀と玄武はともに北壁に描かれる。
杉本一九七五(注9)。
- (28) 羅哲文「和林格爾漢墓壁畫中的一些古建築」『文物』一九七四年第一期。
- (29) 注(11)、(12)参照。
- (30) 實物では沂南畫象石墓の獨立柱にのる双斗(曾等一九五六(注27)、圖版一〇—一三)、畫象石では唐河針織廠畫象石墓の樓閣圖の下層(周到・李京華「唐河針織廠漢畫象石墓的發掘」『文物』一九七三年第六期、圖一五、一七など)。
- (31) 梁思成「薊縣獨樂寺觀音閣山門考」『中國營造學社彙刊』第三卷第二期 北京、一九三二。
- (32) 張仲一・曹見賓・傅高傑・杜修均「徽州明代住宅」建築工程出版社、北京、一九五七。
- (33) 「釋名」釋宮室「斗、在欒兩頭。如斗也」。
- (34) 張衡「西京賦」(『文選』卷二)薛綜注「欒、柱上曲木。兩頭受檼者」。
- (35) 曾等一九五六(注27)。
- (36) 河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺漢畫象石墓發掘報告」『考古學報』一九六三年第一期。
- (37) 湖南省博物館・中國科學院考古研究所「長沙馬王堆二、三號漢墓發掘簡報」『文物』一九七四年第七期。
- (38) 金維諾「談長沙馬王堆三號漢墓帛畫」『文物』一九七四年第一期。
- (39) 金維諾・衛邊「唐代西州墓中的絹畫」『文物』一九七五年第一〇期。
- (40) 吐魯番の張氏墓群のうち張清說墓は、清朝最末の王樹丹「新疆訪古錄」には、墓室の四壁および頂部に佛像を描いていたと傳えるが、最近の發掘によるとすでに失われていたという(新疆維吾爾自治區博物館・西北大學歷史系考古專業「一九七三年吐魯番阿斯塔那古墓群發掘簡報」『文物』一九七五年第七期)。
- (41) 注(1)。
- (42) この種の廡は、敦煌莫高窟淨土變圖にも見られ、『洛陽伽藍記』卷三・景明寺に「青臺紫閣。浮道相通」とあるのも同様であろう。實物は、模型的ではあるが、下華嚴寺薄伽教藏内の天宮壁藏(山西大同、遼・一〇三八)にある。
- (43) 陝西省博物館・文物管理委員會一九七四d、九一ページ。
- (44) 劉致平「中國建築類型及結構」七〇—七三ページ、建築工程出版社、北京、一九五七。
- (45) 敦煌文物研究所考古組「敦煌莫高窟北朝壁畫中的建築」『考古』一九七六年第二期、一一五—一二七ページ。
- (46) 朱章超「唐永泰公主墓壁畫」(人民美術出版社一九六二、所收)。
- (47) 清朝では、このように張り出した部分を雨塔とよび、實物でも北京城の箭樓に、この圖と同様なとりつきが見られる(梁思成「清式營造則例」二三ページ、中國營造學社、北京、一九三四。また中國科學院土木建築研究所・清華大學建築系「中國建築」圖九四、文物出版社、北京、一九五七)。宋代にいう副階(裳階にあたる)、清朝にいう抱厦(向_カ拜にちかい)の形式との區別をしめす唐宋時期の名稱は不詳である。なお、明・方以智「通雅」釋宮に「檐下別起敞房。曰薄水。陸游作撲水。李翊作泊暑」というのは、建築の諸類型に共通するものかどうか明らかでないが、構成としてはほぼ同様のものだろう。なお、身舎に裳階のとりつきばあい、裳階の方を身舎より簡單な斗拱形式とすることは、『營造法式』および後世の遺構では原則となっており、傳統的な手法と考えられる。
- (48) 楊銓之「洛陽伽藍記」卷一・永寧寺「浮圖北有佛殿一所。形如太極殿」。

……寺院牆皆施短椽。以瓦覆之。若今宮牆也。四面各開一門。南門樓三重。通三閣道。去地二十丈。形製似今端門……」。

- (48) 『周禮』考工記・匠人「殷人重屋、堂脩七尋、堂崇三尺、四阿重屋」鄭玄注「四阿、若今四注屋」。

『逸周書』作雒解「乃位五宮。太廟、宗宮、考宮、路寢、明堂。咸有四阿、反坫、重亢、重郎、常累、復格、藻稅。……」。

なお四注は、最近まで寄棟造の意味に用いられている。

- (49) 『倭名類聚抄』卷三居處部屋毛具・鴟尾「唐令云。宮殿皆四阿。施鴟尾」。

仁井田陞「唐令拾遺」八〇一ページ、東方文化學院東京研究所、東京、一九三三。

- (50) 『隋書』卷六八・宇文愷傳にのせる「明堂議表」に「自晉以前、未有鴟尾」とある。

村田治郎「中國鴟尾略史」『佛教藝術』一〇〇號、東京、一九七五。

- (51) 『唐會要』卷三一・輿服上・雜錄「又奏。准營繕令。王公已下。舍屋不得施重椽・藻井。三品已上。堂舍不得過五間九架。廳厦兩頭。門屋不得過五間五架。五品已上。堂舍不得過五間七架。廳厦兩頭。門屋不得過三間兩架。仍通作烏頭門……」。間は、正面の柱間數。架は、奥行きの構架を組み重ねる母屋桁の數。間・架によって建築の規模をしめすのは、六朝以降、清朝にいたるまで一般的な表現方法である。

- (52) 李誠「營造法式」卷五大木作制度二・陽馬「凡堂廳。竝厦兩頭造。則兩梢間用角梁。轉過兩椽。(亭榭之類。轉一椽。今亦用此制爲殿閣者。俗謂之曹殿。又曰漢殿。亦曰九脊殿。按唐六典及營繕令。云王公以下居第竝廳厦兩頭者。此制也)」。折屋は、母屋桁ごとに垂木を折りつなぐ手法のこと。

- (53) 古いものでは、佛光寺大殿(山西五臺・唐・八五七)が當初の一時期吹放しであったと考えられ、晉祠聖母廟正殿(山西太原・北宋・一〇一三)は重層の前面二間を吹放しとする(關口欣也「山西省南禪寺・佛光寺・晉祠の古建築」『建築雜誌』一九七六年一月號、東京)。また

中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について

裳階をもつ建築では、裳階部分を吹放しにしていたと見られる例が多い(中國科學院考古研究所「唐長安大明宮」科學出版社、北京、一九五九、ほか)。

- (54) 田中「中世新様式における構造の改革に關する史的考察」(太田博士還暦記念論文集・日本建築の特質)中央公論美術出版、東京、一九七六、所收。

注(7)。

- (55) 『舊唐書』卷二二禮儀志二「重楣二百一十六條。按周易。乾之策二百一十有六。故置二百一十六條」。

- (56) 李華「含元殿賦」(文苑英華)卷四八「神標峻嶠。鬼疊層楣。高卑迭作。尋尺相持」。

- (57) 李誠「營造法式」卷五大木作制度二・闕額「凡由額施之於闕額之下。廣減闕額二分至三分」。

- (58) 陳明達「漢代的石闕」『文物』一九六一年第二期。

- (59) 劉敦楨「定興縣北齊石柱」『中國營造學社集刊』第五卷第二期。敦煌文物研究所「敦煌壁畫」文物出版社、北京、一九五九。

- (60) 中央人民政府文化部社會文化事業管理局「烟霞寺石窟」中國書店、北京、一九五三。

- (61) 何晏「景福殿賦」(文選)卷一一「爰有禁樞。勒分翼帳。承以陽馬。接以員方」。李善注「樞、附陽馬之短柄也。……勒分翼帳。言如獸勒之分。鳥翼之帳。陽馬、四阿長桁也。禁樞列布。承以陽馬。衆材相接。或員方也」。

- (62) 李善は載初元年(六八九)に卒している(『舊唐書』卷一八九上)。なお、この句の前半は「營造法式」總釋下・椽の項に引かれており、平行垂木については竹島卓一氏が示唆しているが、なお論旨明瞭でないことが惜しまれる(竹島卓一「營造法式の研究」第三卷、八四ページ、中央公論美術出版、東京、一九七一。同「建築技法から見た法隆寺金堂の諸問題」三三二ページ、同、東京、一九七五)。

- (63) 重樞は、「營造法式」では、卷四大木作制度二に「凡鋪作逐跳計心」。

毎跳令棋上只用素方一重。謂之單棋。……若跳瓜子棋上施慢棋。慢棋上用素方。謂之重棋」といい、すなわち計心斗棋を一重にするのを單棋というのに對し、二重にするのを重棋という、としているが、このころ計心斗棋の技法が整備されていたかどうか問題であるし、ここでは専門的な意味ではなく、二手先またはそれ以上の複雑な斗棋の意味で用いたものと考えられる。

- (64) 村田治郎「玉蟲厨子の諸考察」『佛教藝術』六三號、東京、一九六六、一九ページ圖を参照されたい。

- (65) 注(7)。傳喜年氏の論及は、平面・柱・尾垂木配置等に限られているので、殊更に穿鑿するのはあたらないかもしれないが、氏の復原案に従うばあい、詔にみえる上柳八十四枚、陽馬三十六道、枅六十枚の配分、および「其字上圖」「八柱之外。修短總有三等。……置柱長短三等」「櫓、去地五十五尺」等の記述を如何に解釋するのか、やや疑問がのこる。因みに、堂身部のみ尾垂木つき斗棋・二軒を有する上圖下方の重層裳階つき建築とみたほうが、部材員數の解釋はむしろ容易である。なお、この私案でも、尾垂木二本(双下昂)の斗棋、隅に一方のみに出跳する斗棋形式をもつことになるので、いま論じている問題に對して影響はない。その詳細は他に譲りたい。

- (66) 宮川寅雄「隋代陶房と玉蟲厨子」『毎日新聞』一九七四年一月八日、東京。

- (67) 注(40)、圖二八。

- (68) 河南省博物館「靈寶張灣漢墓」『文物』一九七五年第一期。
(69) 鮑鼎・劉敦楨・梁思成「漢代的建築式樣與裝飾」『中國營造學社彙刊』第五卷第二期、北京、一九三四。

- (70) 何晏「景福殿賦」『文選』卷一一「飛柳鳥鳴。雙轅是荷。李善注「飛柳之形。類鳥之飛。又有雙轅。任承檐。以荷衆材。今人名屋四阿棋曰機柳也……」。

- (71) 何晏「景福殿賦」『機樞各落以相承』李善注「機、即柳也」。
(72) 傳喜年氏は、敦煌二二七號窟北壁佛殿圖および佛光大殿を参照して

含元殿を四手先(双抄双下昂)計心に復原したが、計心の技法の有無にはなお問題があり、盛唐期以降の建築の變化については、今後の研究課題といえる。

- (73) 中央美術學院實用美術研究室「敦煌藻井圖案」人民美術出版社、北京、一九五三。

〔表1〕引用文獻目錄(五〇音順)

- 安金槐・王與剛一九七二「密縣打虎亭漢代畫象石墓和壁畫墓」『文物』第一期。

- 安志敏一九五七「評〈望都漢墓壁畫〉」『考古通訊』第二期。

- 雲南省文物工作隊一九六三「雲南省昭通后海子東晉壁畫墓清理簡報」『文物』第二期。

- 王軍・陳徐一九七四「洛陽北魏元父墓的星象圖」『文物』第二期。

- 王增新一九六〇a「遼陽市棒臺子二號壁畫墓」『考古』第一期。

- 同一九六〇b「遼寧遼陽縣南雪村壁畫墓及石墓」『考古』第一期。

- 岡崎敬一九六四「安岳第三號墳(冬壽墓)の研究——その壁畫と墓誌銘を中心として——」『史淵』第九十三輯、福岡。

- 夏竦一九五五「敦煌考古漫記」『考古通訊』創刊號。

- 同一九六五「洛陽西漢壁畫墓中的星象圖」『考古』第二期。

- 何直剛一九五九「望都漢墓年代及墓主人考訂」『考古』第四期。

- 河南省文化局文物工作隊一九六四「洛陽西漢壁畫墓發掘報告」『考古學報』第二期。

- 河北省文化局文物工作隊一九五八「鄧縣彩色畫象磚墓」文物出版社。

- 同一九五九「望都二號漢墓」文物出版社。

- 嘉峪關市文物清理小組一九七二「嘉峪關漢畫象磚墓」『文物』第二期。

- 外文出版社一九七四「漢唐壁畫」。

- 郭沫若一九六四「洛陽漢墓壁畫試探」(『文物精華』第三冊所收)文物出版社。

- 葛治功一九六一「徐州黃山麓發現漢代壁畫墓」『文物』第一期。

- 甘肅省博物館一九七四「武威雷臺漢墓」《考古學報》第二期。
 同 一九七六「從嘉峪關魏晉墓壁畫看河西地區實行的法治措施」《文物》第二期。
 甘肅省博物館・嘉峪關市文物保管所一九七四「嘉峪關魏晉墓室壁畫的題材和藝術價值」《文物》第九期。
 甘肅省文物管理委員會一九五九「酒泉下河清第一號和第一八號墓發掘簡報」《文物》第一〇期。
 關天相・冀剛一九五五「梁山漢墓」《文物參考資料》第五期。
 甘博文一九七二「甘肅武威雷臺東漢墓清理簡報」《文物》第二期。
 胡維高一九五四「記南京西善橋古墓的發掘」《文物參考資料》第二期。
 駒井和愛一九四四「最近發見にかゝる遼陽の漢代壁畫古墳」《國華》第五四編第一〇冊、東京。
 同 一九五〇「考古學研究第一冊・遼陽發見的漢代墳墓」東京大學文學部、東京。
 山西省文物管理委員會一九五九「山西平陸縣村壁畫漢墓」《考古》第九期。
 章毅然一九五五「談梁山漢墓壁畫中的摹繪」《文物參考資料》第五期。
 中國古典藝術出版社一九五五「全國基本建設工程中出土文物展覽圖錄」北京。
 塚本靖一九二一「遼陽太子河附近的壁畫ある古墳」《考古學雜誌》第一一卷第七號、東京。
 東亞考古學會一九三四「營城子」《東亞考古學叢刊》第四冊、東京。
 東北博物館一九五五「遼陽三道壕兩座壁畫墓的清理工作簡報」《文物參考資料》第二期。
 內蒙古文物工作隊・內蒙古博物館一九七四「和林格爾發現一座重要的東漢壁畫墓」《文物》第一期。
 南京博物院・南京市文物管理委員會一九六〇「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」《文物》第八・九期合刊。
 原田淑人一九四三「遼陽南林子的壁畫古墳」《國華》六二九號、東京。
 濱田耕作一九三〇「遼陽附近的壁畫古墳」《東亞考古學研究》所收、岡書

中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について

- 院、東京。
 北京歷史博物館・河北省文物管理委員會一九五五「望都漢墓壁畫」中國古典藝術出版社。
 寶鷄市博物館・千陽縣文化館一九七五「陝西省千陽縣漢墓發掘報告」《考古》第三期。
 八木榮三郎一九二一「遼陽發見的壁畫古墳」《東洋學報》第一一卷第一號、東京。
 俞劍華一九五八「中國壁畫」中國古典藝術出版社。
 姚鑒一九五四「河北望都漢墓的墓室結構及壁畫」《文物參考資料》第二期。
 羅哲文一九七四「和林格爾漢墓壁畫中的一些古建築」《文物》第一期。
 羅福頤一九五六「內蒙古自治區托克托縣新發現的漢墓壁畫」《文物參考資料》第九期。
 洛陽博物館一九七四「河南洛陽北魏元父墓調查」《文物》第二期。
 李慶發一九五九「遼陽土王家村晉代壁畫墓清理簡報」《文物》第七期。
 李文信一九五五「遼陽發見的三座壁畫古墳」《文物參考資料》第五期。
 柳涵一九五九「鄧縣畫象磚墓的時代和研究」《考古》第五期。
 林樹中一九五八「關於望都漢墓壁畫的年代」《考古通訊》第四期。
 【表2】引用文獻目錄（五〇音順）
 王仁波一九七三「唐懿德太子墓壁畫題材的分析」《考古》第六期。
 岡崎敬一九六二「唐・張九齡の墳墓とその墓誌銘」《史淵》第八九輯、福岡。
 賀梓城一九五九「唐墓壁畫」《文物參考資料》第八期。
 外文出版社一九七四「漢唐壁畫」北京。
 廣東省文物管理委員會・華南師範學院歷史系一九六一「唐代張九齡墓發掘簡報」《文物》第六期。
 祈英濤・杜仙洲・陳明達一九五四a「兩年來山西省發現的古建築」《文物參考資料》第一期。
 同（補遺寫真）一九五四b「文物參考資料」第二期。
 北川桃雄一九六九「大同の古寺」中央公論美術出版、東京。

- 顧鐵符一九五六「西安東郊唐墓壁畫中的斗拱」『文物參考資料』第一期。
- 山西省文物管理委員會一九五五『山西文物介紹』山西人民出版社。
- 同一九五九 a 「太原市金勝村第六號唐代壁畫墓」第八期。
- 同一九五九 b 「太原南郊金勝村唐墓」『考古』第九期。
- 新疆維吾爾自治區博物館一九七三「吐魯番縣阿斯塔那—哈拉和卓古墓群發掘簡報（一九六三—一九六五）」『文物』第一〇期。
- 人民美術出版社一九六三『唐永泰公主墓壁畫集』。
- 陝西省考古所唐墓工作組一九六〇「西安東郊唐蘇思勗墓清理簡報」『考古』第一期。
- 陝西省社會科學院考古研究所一九六三「陝西咸陽唐蘇君墓發掘」『考古』第九期。
- 陝西省博物館乾縣文教局唐墓發掘組一九七二 a 「唐章懷太子墓發掘簡報」『文物』第七期。
- 同一九七二 b 「唐懿德太子墓發掘簡報」『文物』第七期。
- 陝西省博物館禮泉縣文教局唐墓發掘組一九七二「唐鄭仁泰墓發掘簡報」『文物』第七期。
- 陝西省博物館・文物管理委員會一九七四 a 「唐李賢墓壁畫」文物出版社。
- 同一九七四 b 「唐李重潤墓壁畫」文物出版社。
- 同一九七四 c 「唐李壽墓發掘簡報」『文物』第九期。
- 同一九七四 d 「唐李壽墓壁畫試探」『文物』第九期。
- 陝西省文物管理委員會一九五六「西安東郊唐墓壁畫」『考古通訊』第六期。
- 同一九五九 a 「西安羊頭鎮唐李爽墓的發掘」『文物』第三期。
- 同一九五九 b 「長安縣南里王村唐韋洞墓發掘記」『文物』第八期。
- 同一九六四「唐永泰公主墓發掘簡報」『文物』第一期。
- 同一九六六「陝西省三原縣雙盛村隋李和墓清理簡報」『文物』第一期。
- 中國古典藝術出版社一九五五『全國基本建設工程中出土文物展覽圖錄』北京。
- 張正嶺一九五七「西安韓森寨唐墓清理記」『考古通訊』第五期。
- 傅熹年一九七三「唐長安大明宮含元殿原狀的探討」『文物』第七期。

- 武伯倫一九六三「唐永泰公主墓誌銘」『文物』第一期。
- 李永是一九七二「談章懷・懿德兩墓的形制等問題」『文物』第七期。
- 插圖出典目錄（表1、表2引用のものは略記）
- (1) 筆者撮影（一九七五年八月）。
- (2) 關口欣也「山西省南禪寺・佛光寺・晉祠的古建築」『建築雜誌』一九七六年一月號、東京、圖六（同圖は、梁思成「記五臺山佛光寺的建築」『文物參考資料』一九五三年第五・六期合刊、九一ページ圖を補正）。
- (3) 梁思成・劉致平「建築設計參考圖集第四集斗拱」中國營造學社、北京、一九三六、圖版捌一。
- (4) 內蒙古文物工作隊・內蒙古博物館一九七四、圖八。
- (5) 同右、圖一〇。
- (6) 關天相・冀剛一九五五、圖版六。
- (7) 李文信一九五五、挿圖一三。
- (8) 同右、挿圖三一。
- (9) 雲南省文物工作隊一九六三、扉圖一。
- (10) 同右、扉圖三。
- (11) 同右、圖版肆一二。
- (12) 陝西省博物館・文物管理委員會一九七四 c、圖一四・一五。
- (13) 陝西省文物管理委員會一九五九 b、圖二。
- (14) 王仁波一九七三、圖三一・二。
- (15) 陝西省博物館・文物管理委員會一九七四 c、圖一八。
- (16) 同右、圖二六。
- (17) 同右、圖二七。
- (18) 同右、圖二五。
- (19) 同右、圖五。
- (20) 陝西省文物管理委員會一九五九 a、圖八。
- (21) 同右、圖六。
- (22) 山西省文物管理委員會一九五五、圖版二圖四。

- (23) 陝西省文物管理委員會一九六四、圖一〇。
- (24) 北川一九六九、二七ページ右圖。
- (25) 人民美術出版社一九六三、挿圖四。
- (26) 同右、挿圖二右。
- (27) 外文出版社一九七四、圖七七。
- (28) 同右、圖八六。
- (29) 王仁波一九七三、圖三一—四。
- (30) 同右、圖四。
- (31) 同右、圖三一—四。
- (32) 陝西省文物管理委員會一九五九b、圖三〇。
- (33) 同右、圖二六。
- (34) 同右、圖三一。
- (35) 山西省文物管理委員會一九五九a、圖二。
- (36) 同右、圖三。
- (37) 陝西省文物管理委員會一九五六、圖版拾陸—二。

- (38) 賀梓城一九五九、三三ページ上圖。
- (39) 敦煌文物研究所「敦煌壁畫」文物出版社、北京、一九五九。
- (40) 筆者撮影（一九七五年八月）。
- (41) 同右。
- (42) 「中華人民共和國出土文物展」圖錄、圖一〇四。
- (43) 筆者作圖。
- (44) 筆者撮影（一九七五年八月）。

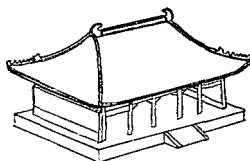
説明圖

- (1) 劉致平「中國建築類型及結構」圖四九九よりリライト。
- (2) 同右、圖三一四よりリライト。
- (3) 筆者撮影（a・法隆寺中門、b・佛光寺大殿）。

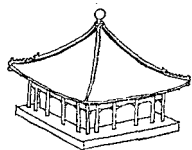
（本論は昭和五一年度文部省科學研究費「中世大佛樣建築の研究」による成果の一部である）。



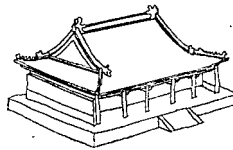
切妻〔懸山〕



寄棟〔庖殿〕

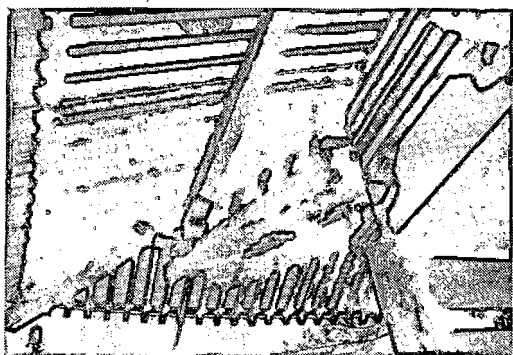


宝形〔攢尖〕

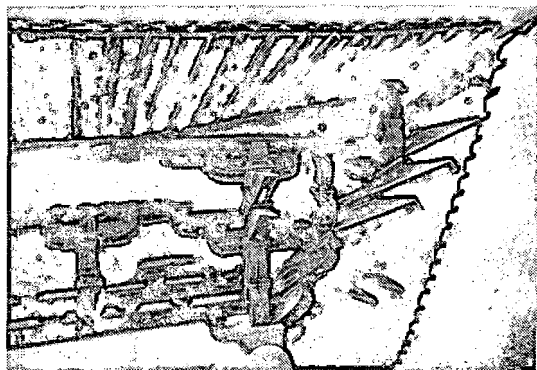


入母屋〔歇山〕

(1) 屋根の形式 (用語は、日本語〔中國語〕の順)

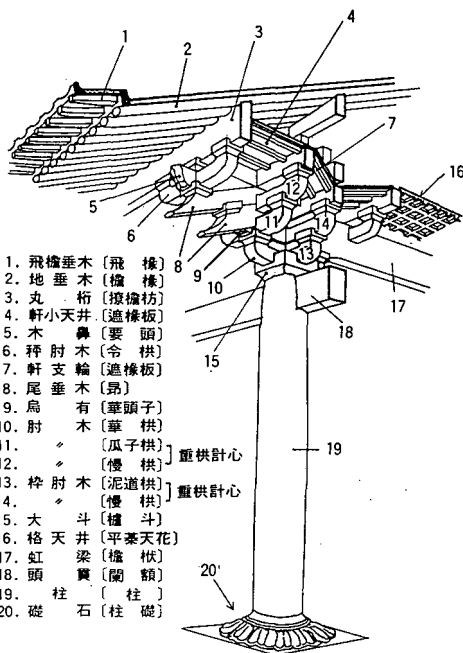


a. 平行垂木



b. 扇垂木

(3) 垂木配置



(2) 細部の名稱